

50年の軌跡

徳島県「川島町」
2004 50周年記念誌

History of Kawashima for 50 years

町と人が 紡いだ 半世紀

昭和30年に誕生した川島町
それから、半世紀の時が流れました
町と人が描いた50年の軌跡を
しっかりと心に刻み、そして未来へと伝えます

我が心の川島町

～ふるまいの風景～

〈特集〉

川と人の物語

町の50年—歩み続ける町の姿

川島町のあけぼの

町制施行以前の川島町

川島町、誕生

昭和30年～昭和39年

町の基盤を築く

昭和40年～昭和49年

飛躍する町

昭和50年～昭和59年

川島町、充実の時

昭和60年～平成5年

新たな道へ

平成6年～平成15年

町並今昔

1

5

9

11

13

15

17

19

21

23

「川島町」
50年の軌跡

町と人が紡いだ半世紀

イラスト図鑑

（川島町の動物・植物）

25

人の50年―人々の暮らしの変遷

27

- ・かわしま歳時記
- ・郷土の伝統産業

29

31

◎あなたに伝えたい―川島町保存版

32

むかしの暮らし
おじいちゃんおばあちゃんが子どものころは

33

ふるさと伝説紀行

35

天気予報の今むかし

37

郷土愛から生まれた絆・姉妹町仁木町

38

・ふるさと地区自慢

39

・50周年記念座談会
未来に届け！川島の志 ―世代を越えてつなぐ思い―

41

川島町マップ

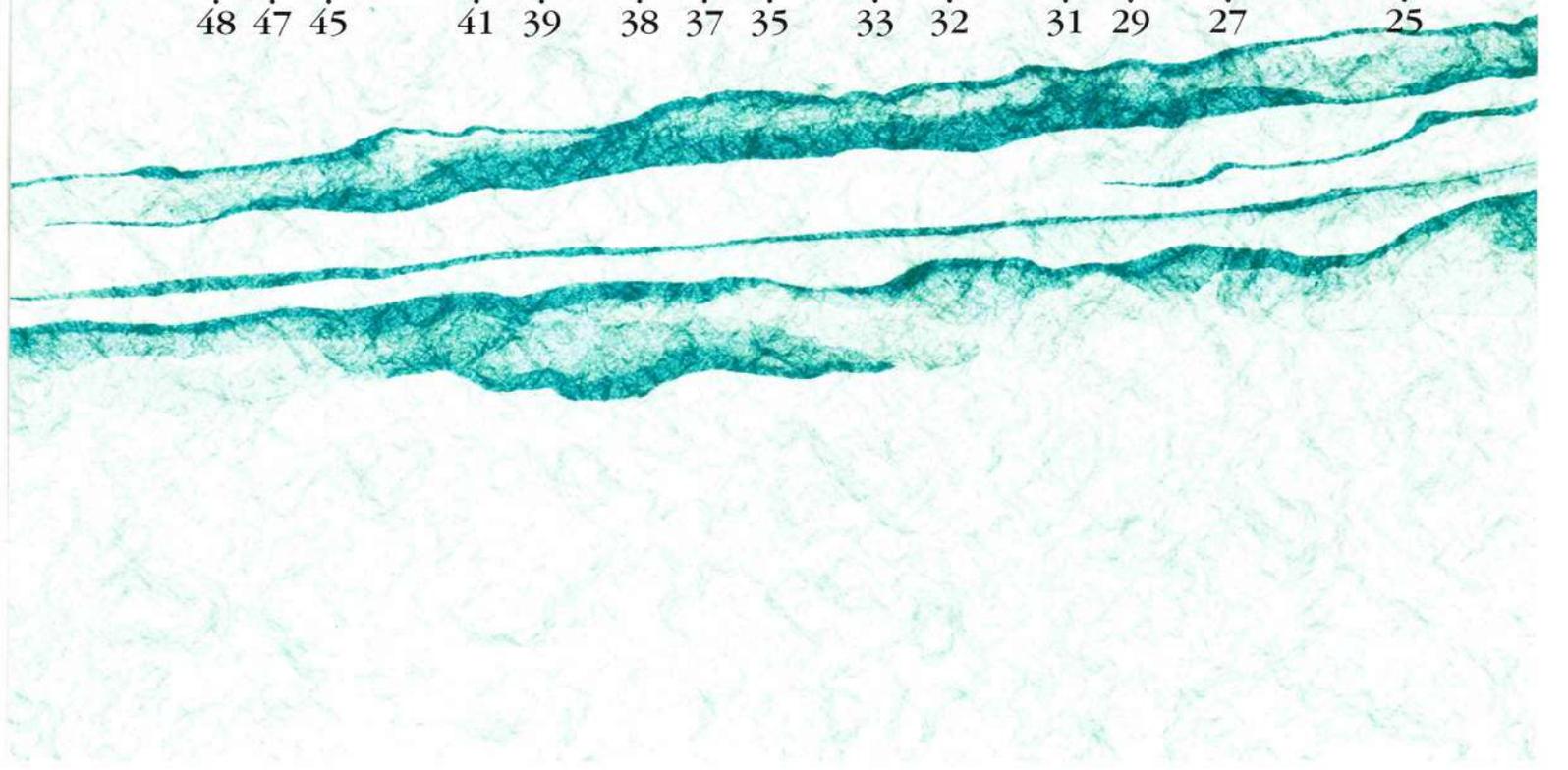
45

まちのインフォメーション

47

発刊のごあいさつ

48



ふるさとの風景

川島城に映える満開の桜、日々表情を変える吉野川の流れ
小さいころから見ていた何気ない風景が
私たちの心に刻み込まれ、ふるさとの原風景となるのです。

我が心の

川島町

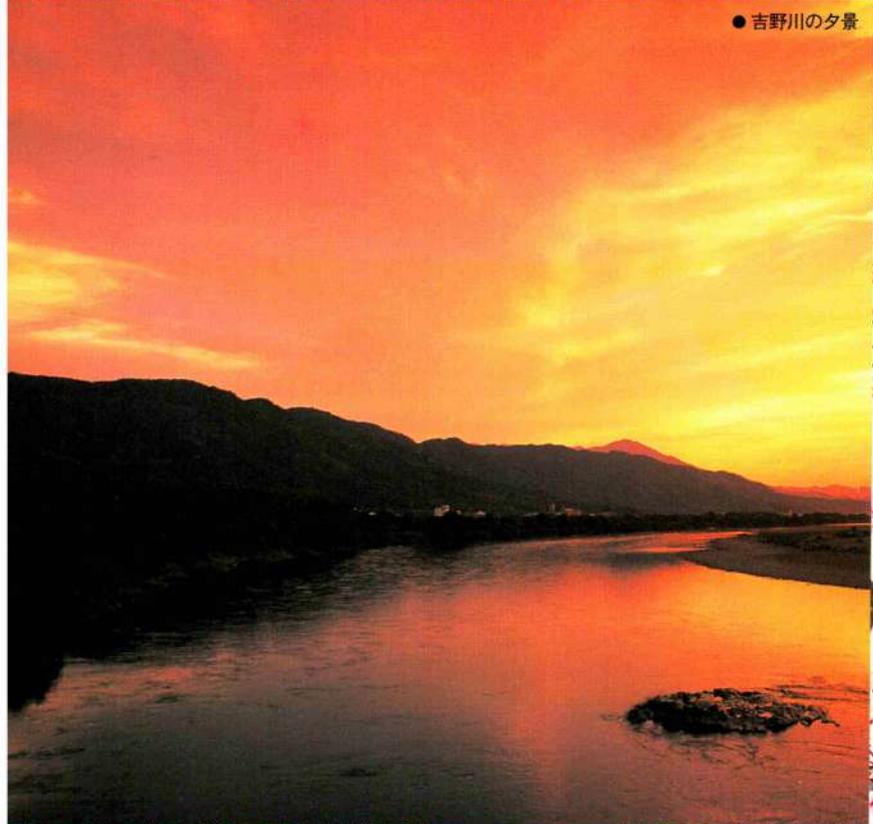


● ハンゴン草

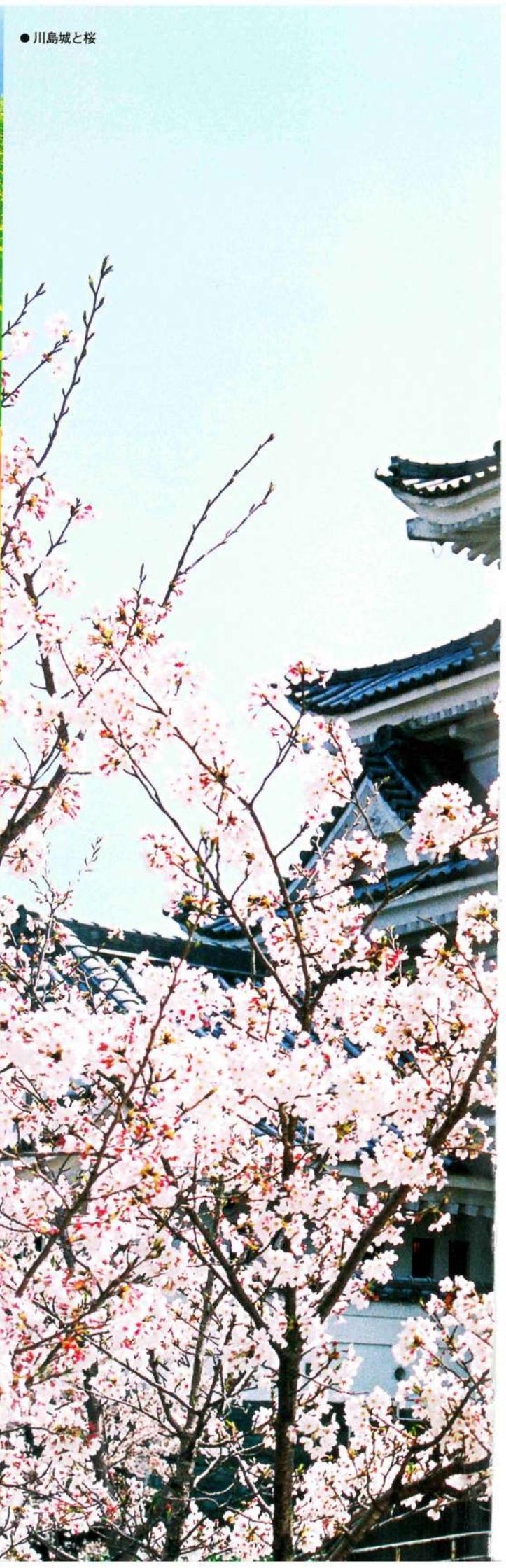
● 川島城と桜



● 吉野川の夕景



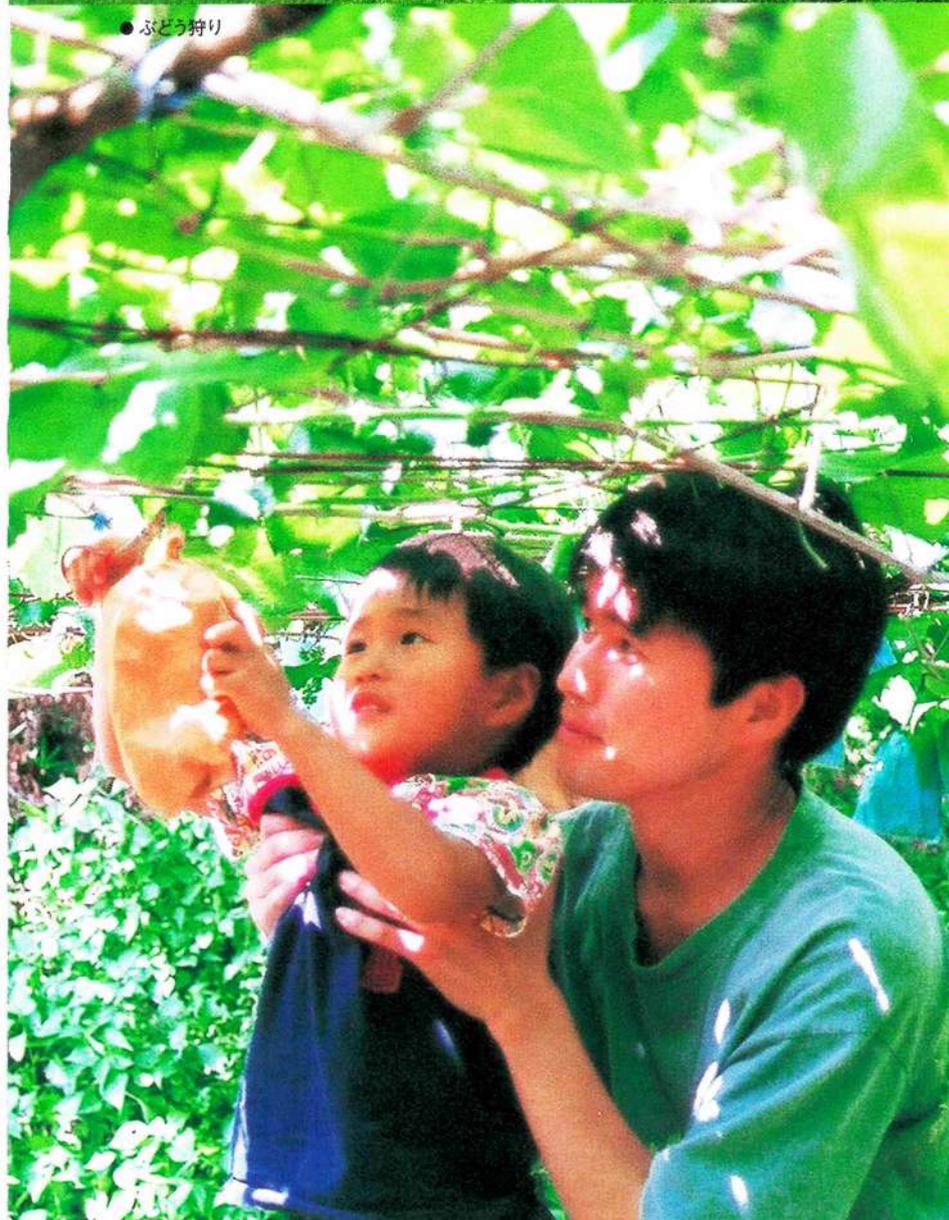
● 水神の滝





くろととの風景

● 阿波麻植大橋



● ぶどう狩り



● 菜の花

我が心の川島町



● ニツ森公園の桜



《特集》

川と人の物語

穏やかな表情を見せたかと思えば、時に恐ろしい自然の牙をむく吉野川。
川島町の人々は、川とともに生き、町の歴史を築いてきたのです。
そして、そこには、たくさんの物語がありました。

学島潜水橋

吉野川とともに 歩んだ川島町

日

本三大河川の一つであり「四国三郎」とも称される吉野川。その豊富な水は、流域に暮らすおよそ二百五十万人もの人々の暮らしを支えています。

吉野川の中流に位置する川島町も、川の恵みを享受している町の一つです。四国山地から生まれた大小五十の清流は、桑村川や学島川を経て吉野川に注ぎます。これらの水辺は四季折々にその表情を変え、美しい景観を見せてくれます。川は人々の生活を支えるだけでなく、心のよりどころであり、ふるさとの風景となっているのです。

しかし、川島町は山と川にはさまれた水の町。平地は海拔二十メートル前後の吉野川の沖積層からなっています。このような場所は、川が土砂を運び堆積してきたため、表層は肥沃な壤土ですが、下部は深い砂礫層となっていることが少なくありません。また、洪水がおきると絶えず吉野川の氾濫に見舞われます。しかし、この地域は重要な生活舞台であり、住宅地としてはもちろん、阿波藍や養蚕の桑の生産地でもありました。

古来から幾多の水の洗礼を受けてきた川島町ですが、その地理的・自然的環境を生かし、政治と交通の要衝として、吉野川とともに今日の町を築いてきたのです。

人も物も集まった往時の川島浜

現

在のように陸上交通が発達する以前は、吉野川は阿波の東西に伸びる大動脈で、人と貨物が往来する交通幹線でした。

川島浜は、吉野川の中に位置し、川の流れが緩やかで水深も深いため、舟が接岸しやすい最良港でした。また、ここから下流には立ち寄るのに便利な浜はなく、川島浜は吉野川下流域の物資の集散地となり、毎日十五、六隻の舟が泊まっていたと言われています。そのため、現在の岩の鼻一帯に飲食店や旅館が軒を連ね、あたかも街道宿場の観を呈し、明治四十年ごろに最盛を極めました。

また、善人寺島に渡るには、渡し舟が唯一の交通機関でした。三ツ島・兎島・桑村・戎堂・川島には渡し場が設けられ、農夫や商人、職人や学生など、いろいろな人が渡し舟を利用していました。

しかし、時代は進み、汽車が通じ、道路が改良されて自動車が往来するようになると、しだいに舟運は衰え、学島や川島に潜水橋が架けられた昭和三十五年前後には、舟の姿はしだいに見られなくなっていました。渡しや浜、吉野川を上下する舟は、水辺の里・川島の懐かしい風物として、人々の記憶の中にとどまっています。



渡し場跡



吉野川沿いの堤防



高石垣の家屋

川と人々の長い闘い

吉

野川の左岸は、阿讃山脈を背にした扇状地で地形が高い一方、右岸の平地は洪水の被害に遭いやすい環境でした。また、川島町は吉野川の屈曲点という洪水を受けやすい地点に位置しています。さらに、善人寺島をはさんで二分されていた吉野川ですが、北側を流れる善人寺川が土砂堆積のために小さくなってその水量が南側に移り、南側の吉野川が本流化して流れが激しくなったため、川島町の洪水被害は何倍にもふくれ上がりました。

中世には、阿波の守護・細川氏が、現在の山川町山崎から川島町学にかけて堤防を築いたと伝えられ、また近世末ごろには、住民の手によって地域を守る堤防が築かれました。しかし、これらの堤

防は部分的で高さも低く、根本的な洪水対策にはなりません。また、浸水の被害を防ぐために作られた高石垣の家屋は、今日でも町内の至る所に残り、かつての水禍を物語っています。

このように、流域住民はさまざまな工夫を凝らして対策を講じてきましたが、大がかりな河川改修は民間の手には負えず、長い年月が経過してしまいました。明治二十年、政府はようやく莫大な費用を投じて吉野川の改修工事に着手しました。しかし、翌年に大洪水がおこり、洪水被害を受けたのは改修工事が原因という誤解のもとに猛反対を受け、明治二十二年には工事が中止されてしまいました。結局、本格的な改修工事は大正期に入ってからになります。

一 時は中止された吉野川改修工事ですが、流域住民の陳情や懇願の努力が実り、再び着工されることになりました。この工事の中で大きな問題となったのが善入寺島の遊水地帯化です。

善入寺島は、吉野川とその支流の善入寺川との間にできた面積四百八十八ヘクタールの中洲地域で、およそ五百戸、三千余人が暮らしていました。

明治四十年に発表された工事計画には、善入寺島を河川敷として遊水地帯化し、吉野川の急流を緩和するための機能を持たせ、それによって堤防の負担を軽

吉野川改修工事と善入寺島



現在の善入寺島
 改修工事後も、善入寺島では川島町や市場町の農家によって毎年スイカや大根などが生産され、県外にも多く出荷されています。



善入寺島移転の碑
 大正10年、川島町城山に建立されました。善入寺島の沿革と改修工事によって移転を余儀なくされたいささつ、移転をした人々のうちこの碑を建立した人々の氏名が刻まれています。

くするということが含まれていたのです。この計画が発表されてからというもの、島民の間でさまざまな議論がありました。愛着深い土地を離れることに多くの人々が躊躇しましたが、吉野川改修工事という大事業目的の前には、忍ばなければならぬ犠牲でした。結局、全島水没、全島民移住という結論に至り、大正四年の強制退去命令によって、善入寺島は無名島と化しました。

改修工事は明治四十四年に着工し、十五年の歳月を要して昭和二年に完成しました。

川島潜水橋



水禍を克服した町と人々

昭

和二年に吉野川改修工事が完成し、沿岸町村は洪水被害からまぬがれるようになりましたが、長雨が続き桑村川・学島川がふれて大被害を受けました。そんな中、内水排除が新たな問題として浮かび上がってきたのです。

昭和三十六年の第二室戸台風は超大型で、風雨が強い上に長時間におよびました。この時行われた水害調査をもとに排水工事が作られ、昭和三十九年に川島排水機場、昭和四十一年に学島排水機場が完成しました。しかし、この排水施設を生かすためには、導水路である桑村川と学島川の整備が新たな課題となりました。これらの河川は、現在に至

るまでさまざまな改修工事が続けられています。

水は生活に必要不可欠でありながら、その反面、大きな災害をもたらすこともあります。川島町の人々は吉野川の恩恵を受けるとともに、水禍に悩まされ続けてきました。昭和四十七年、川島排水機場に、治水の記念碑が立てられました。そこには、今までの水害状況と、それに対処した川島町民の苦勞が刻まれています。堤防や排水機場が整備された現在は、以前ほどの洪水被害を受けることはありませんが、水の偉大さ、恐ろしさを忘れてはならないという先人から子々孫々への警鐘となっています。



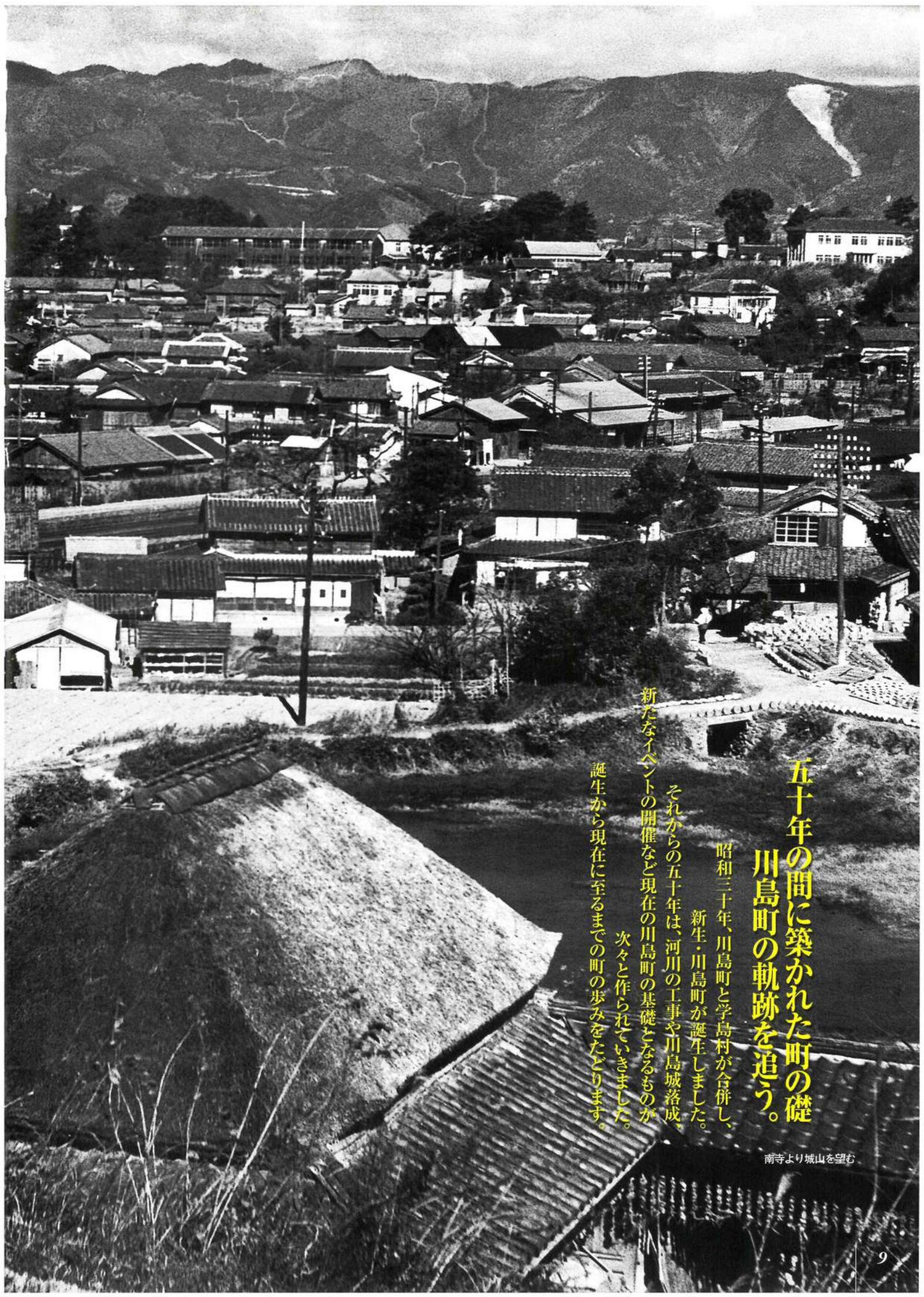
排水機場

川島、学島の両排水機場は、排水機2台を設置した、ポンプ排水を中心とする施設です。学島排水機場には昭和53年に新たに排水機1台が増設されました。

台風被害の様子

床上や床下浸水、家屋の水没など、台風は甚大な被害をもたらしました。





五十年の間に築かれた町の礎 川島町の軌跡を追う。

昭和三十年、川島町と学島村が合併し、

新生・川島町が誕生しました。

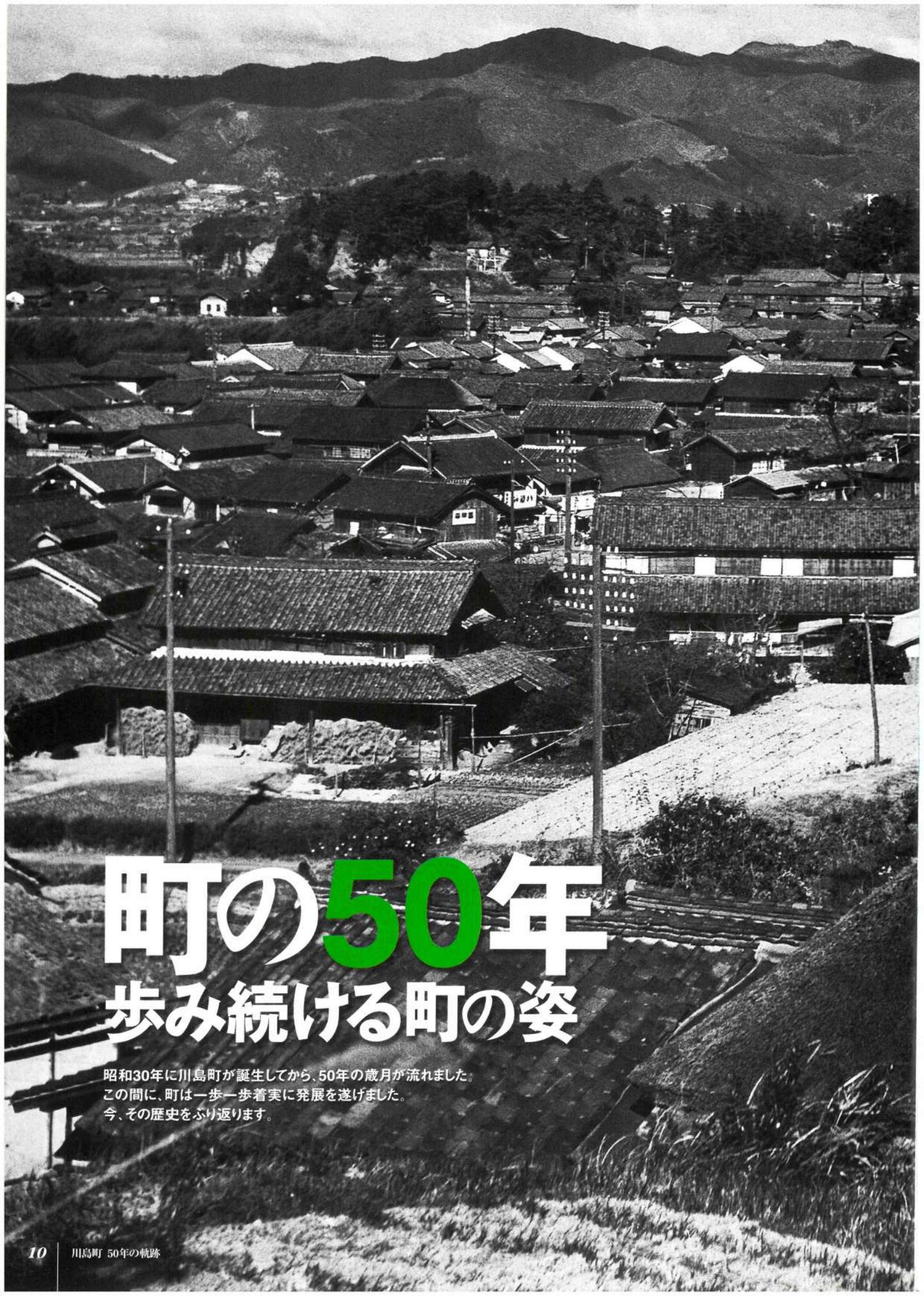
それからの五十年は、河川の工事や川島城落成、

新たなイベントの開催など現在の川島町の基礎となるものが

次々と作られていきました。

誕生から現在に至るまでの町の歩みをたどります。

南寺より城山を望む



町の50年

歩み続ける町の姿

昭和30年に川島町が誕生してから、50年の歳月が流れました。
この間に、町は一步一步着実に発展を遂げました。
今、その歴史をふり返ります。

古代

川島の起り

町内からは、縄文時代以前に使われていたとされる石器が出土しており、この地には数万年前のむかしから人々が生活を営んでいたことがわかっています。

また、弥生時代のものと思われる石斧や石包丁、弥生式土器、青銅製中型の横帯流水文銅鐸なども出土しており、このころには多くの人々が山麓や高台に居住し、田畑を開いて稲作を行い、各地に集落を形成していました。こうして各地に形成された「むら」はしだいに大きくなり、

川島町のあけぼの

町の 50 年

歩み続ける町の姿

古来より阿北文化の中心的な町であった川島町。
古墳や城跡、寺社仏閣…
興味深い町の歴史をひも解きます。



横帯流水文銅鐸
明治18年5月、川島城二の丸跡より出土しました。



「くに」へと発展していったのです。
大和朝廷の時代には各地に古墳が築かれ、川島町にも鳶ヶ巣古墳群や峯八古墳群など数多くの古墳が残されています。また、正倉院御物の「川島郷忌部為麻呂の調のあしぎぬ」の存在から、麻植郡一帯を忌部氏が支配し、木綿や麻布を作り朝廷に貢納していたことがわかっています。

中世

次々と代わる支配者

中世社会の基礎であった阿波の荘園制は鎌倉幕府によって崩され、室町時代になると足利尊氏の重臣・細川和氏によって、阿波は武力で侵略されました。しかし、下克上の世となり、細川氏の勢力が衰えると、まもなくその家臣・三好氏にとって代わられました。

三好氏は代々英才を出し、三好長慶の時に事実上室町幕府を支配しました。阿波、



刀剣
表に「津田近江守助直」裏に「一試快断胸背、貞享元年二月」の銘があります。

三好氏もこれと呼応し、長慶をバックアップしつつ、阿波国をその勢力下に置き、長慶の弟・義賢、その子・長治の二代に渡って阿波を支配しました。

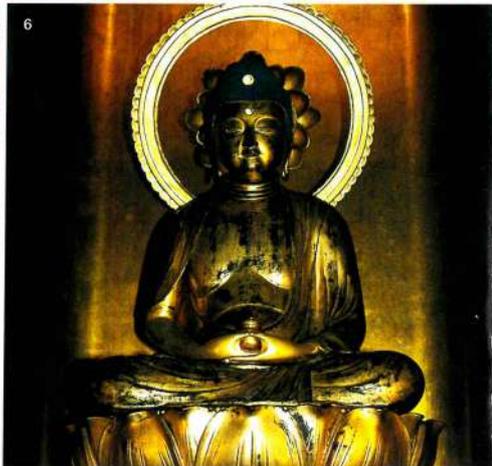
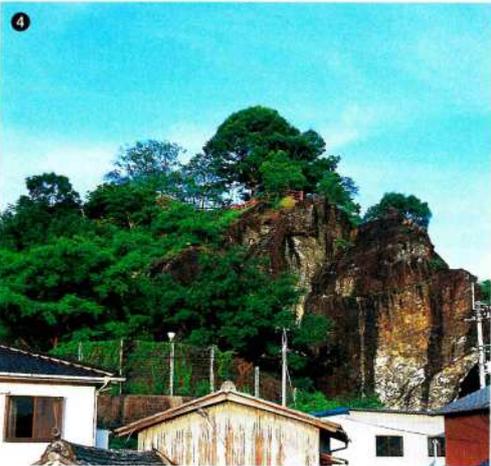
義賢の死後、上桜城主の篠原長房が阿波三好氏を盛り立て多大な功績を残しましたが、長治に疎まれ、攻め滅ぼされてしまいました。上桜城陥落後は、三好氏の家臣であった川島兵衛之進が川島城を築きました。しかし、篠原長房亡き後の阿波三好氏に国衆の心は離れ、やがて長治は裏切りに遭い自刃し、この混乱を土佐の長宗我部氏に突かれ、川島兵衛之進も戦死しました。長宗我部軍が阿波に侵入し、薬師寺を攻めた時、本尊の薬師如来が蜂の大群に化身して寄せ手に襲いかかり、そのため兵火をまぬがれたという伝説があります。

また、上桜城・川島城のほかにも、現在の学駅の東側には学城があったとされています。二ツ森公園には学城主であった工藤伊賀守形見碑が建立されています。

- ① 峯八古墳群
- ② 鳶ヶ巣古墳群
- ③ 工藤伊賀守形見碑
- ④ 川島城跡
- ⑤ 上桜城跡
- ⑥ 薬師如来像

⑦ 川島神社

旧川島町内の44の神社を合併して大正5年10月現在地に社殿を移築し、川島神社と改称しました。吉野川改修工事のため善入寺島全戸が移転を余儀なくされた時も島内の神社を合祀しました。



近世

蜂須賀氏の施政

織田信長に代わって天下を掌握しようとした羽柴秀吉は、天正十三年、四国征伐に乗り出しました。長宗我部軍は大敗し、代わって阿波国は蜂須賀氏が支配するようになりました。この後、徳川幕府下も阿波国は蜂須賀氏の施政で生き続けていくことになりました。

近現代

新・川島町の誕生

明治維新が起こり、社会構造が大きく変化する中で、明治二十二年に郡・町村制が施行されました。川島町・宮島村・桑村・山田村が合併し「桑川村」、学村・児島村・三ツ島村が合併し「学島村」と称しました。明治四十年に桑川村は町制を施行し、町名も「川島町」と改めました。

昭和二十八年に市町村合併促進法が制定公布され、昭和三十年二月十一日に川島町と学島村は合体合併し、新たな「川島町」が誕生しました。

川島町、誕生

昭和30年～昭和39年
町の50年（歩み続ける町の姿）

- | | | |
|-------|-----|--|
| 昭和30年 | 2月 | 川島町と学島村が合併し、新生川島町が誕生 |
| | 3月 | 初代町長に笹本初太郎氏が就任
町議会は議員数三十六名で発足 |
| | 5月 | 川島西保育所を開設 |
| | 8月 | 川島西中学校を新築 |
| | 12月 | 議員定数を二十二名に削減
消防自動車購入 |
| 昭和31年 | 6月 | 川島敷物株式会社を誘致 |
| | 10月 | 任命制による教育委員会を設置 |
| 昭和32年 | 1月 | 吉野川ヒューム工業株式会社を誘致 |
| | 3月 | 川島、学島の消防団を統合 |
| 昭和34年 | 3月 | 第二代町長に水田房次郎氏が就任
議員定数を十四名に削減 |
| | 4月 | 川島町役場新庁舎が完成 |
| | 4月 | 法務局、裁判所、検察庁を改築 |
| | 7月 | 川島小学校プールが完成 |
| 昭和35年 | 9月 | 横田精工株式会社・株式会社矢田製作所に
工場誘致条例を適用
オリヂンモード徳島工場を誘致 |
| 昭和36年 | 6月 | 橋本建設大臣が水害状況視察のため来町 |
| 昭和37年 | 7月 | 川島、学島の両農協が合併 |
| | 8月 | 川島潜水橋を架橋 |
| 昭和38年 | 4月 | 町長に水田房次郎氏が再選
桑村川小規模河川改修事業に着手 |
| 昭和39年 | 7月 | 学島出張所西公民館へ移転 |
| | 8月 | 川島農協有線電話が開通 |
| | 9月 | 川島排水機場が完成（六トン二台）
東洋造花株式会社四国工場を誘致 |



昭和34年
川島町役場庁舎新築

新庁舎の落成に際しては、当時の水田房次郎町長が全職員に対し、新庁舎落成の祝辞を述べました。

世の中の動き

昭和32年 10月	昭和33年 12月	昭和34年 1月	昭和35年 4月	昭和36年 1月	昭和37年 6月	昭和38年 11月	昭和39年 10月
ソ連、初の人工衛星打ち上げ成功	東京タワー完成(日本)	一万円札発行(日本)	メートル法施行(日本)	皇太子さま(現天皇陛下)ご成婚(日本)	カラータレビ放送開始(日本)	アメリカ、ケネディ大統領就任	ガガーリン少佐、人類初の宇宙飛行
					ベルリンの壁構築	日本一長い若戸大橋開通(日本)	ケネディ大統領暗殺
					北陸トンネル開通(日本)	東海道新幹線営業開始(日本)	オリンピック東京大会開催(日本)



昭和37年
川島潜水橋を架橋

県道津田川島線に、吉野川をまたぐ川島潜水橋が架けられ、対岸への行き来が便利になりました。



昭和30年ごろ
旧学島村役場

旧庁舎が取り壊され新庁舎が完成するまでの間、旧学島村役場が仮庁舎として使用されていました。



昭和30年ごろ
旧川島町役場

昭和34年に新庁舎が完成するまでは、旧川島町の役場が、そのまま新川島町の役場として使用されていました。

昭和39年
川島農協有線電話開通

加入者892戸の期待の中に、有線電話が開通し、昭和47年には自動ダイヤル化しました。



理想にむかって前進する教育を

戦後から現在に至るまでの川島町の教育現場をふり返ると、昭和61年に川島町が行った生涯学習の町宣言をきっかけに、保育所・幼稚園・小中学校の職員が一丸となってその推進に取り組んだことや、昭和62・63年度に学島小学校・川島中学校・川島幼稚園がそれぞれ同和教育研究の指定校となり、同和教育の早期解決を目指して、学校と地域社会とが連携を深めながら研究と実践を重ねたことなどが思い出されます。

私は、このような取り組みを行いながら、子どもの自主性を尊重し長所を見出し、育てていくこと、思いやりのある子どもを育てることをいつも目標にしていました。

元校長・元教育長 山口晋さん
校長として、教育長として
川島町の教育に大いに寄与されました。



町の基盤を築く

昭和50年
〜歩み続ける町の姿〜

昭和40年〜昭和49年



昭和43年
川島中学校校舎完成

昭和40年に川島東・西中学校が統合して川島中学校が発足し、昭和43年に新校舎に移転、校舎落成式が挙行されました。

- | | | | | | | | | |
|------------------|-----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|-----------|------------|--------------------|
| 昭和49年 | 昭和48年 | 昭和47年 | 昭和46年 | 昭和44年 | 昭和43年 | 昭和42年 | 昭和41年 | 昭和40年 |
| 5月 | 3月 | 6月 | 3月 | 3月 | 1月 | 4月 | 2月 | 2月 |
| ・北海道仁木町と姉妹町盟約を締結 | ・川島西保育所の改築工事が完了 | ・麻植学校給食センターを新築 | ・町内全域の水道工事が完了 | ・学島小学校の改修工事が完了 | ・阿波麻植大橋架設工事を開始 | ・川島同庁舎を新築 | ・川島合同庁舎を新築 | ・立町十周年記念式典を開催 |
| | | | | | | | | 3月 |
| | | | | | | | | ・川島東、西中学校廃校 |
| | | | | | | | | 4月 |
| | | | | | | | | ・統合川島中学校を設置 |
| | | | | | | | | 10月 |
| | | | | | | | | ・統合川島中学校の校舎建設を開始 |
| | | | | | | | | 12月 |
| | | | | | | | | ・ヤシロ商事株式会社誘致 |
| | | | | | | | | 7月 |
| | | | | | | | | ・川島警察署新庁舎が完成 |
| | | | | | | | | 6月 |
| | | | | | | | | ・学島排水機場が完成(三トニ二台) |
| | | | | | | | | 7月 |
| | | | | | | | | ・学島小学校プールが完成 |
| | | | | | | | | 4月 |
| | | | | | | | | ・三立電気株式会社徳島工場誘致 |
| | | | | | | | | 町長に水田房次郎氏が三選 |
| | | | | | | | | 11月 |
| | | | | | | | | ・無人電話交換局を開設 |
| | | | | | | | | 12月 |
| | | | | | | | | ・学島川河川局部改良事業に着手 |
| | | | | | | | | 1月 |
| | | | | | | | | ・株式会社チロル工場誘致 |
| | | | | | | | | 優良町として全国町村会より表彰される |
| | | | | | | | | 2月 |
| | | | | | | | | ・阿波麻植大橋架設期成同盟会を結成 |
| | | | | | | | | 3月 |
| | | | | | | | | ・岩ノ鼻堤防工事が完了 |
| | | | | | | | | 5月 |
| | | | | | | | | ・川島中学校の新校舎が完成 |
| | | | | | | | | 12月 |
| | | | | | | | | ・川島幼稚園の改修工事が完了 |
| | | | | | | | | 3月 |
| | | | | | | | | ・桑村川第一期改修工事が完了 |
| | | | | | | | | 6月 |
| | | | | | | | | ・川島中学校プールが完成 |
| | | | | | | | | 7月 |
| | | | | | | | | ・国営開拓パイロット事業に着手 |
| | | | | | | | | 4月 |
| | | | | | | | | ・第三代町長に木野久夫氏が就任 |

世の中の動き

昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年
10月	7月	5月	3月	4月	1月	10月
・ソ連惑星探査機金星着陸	・郵便番号制実施(日本)	・川端康成ノーベル文学賞受賞(日本)	・東名高速道路全通(日本)	・アポロ11号月面着陸	・日航機よど号ハイジャック事件(日本)	・国勢調査、人口一億人突破(日本)
						・老齡年金支給開始(日本)
						・児童手当制度開始(日本)
						・札幌冬季オリンピックピック開催(日本)
						・沖縄返還(日本)
						・日中国交正常化
						・老人医療支給制度開始(日本)
						・石油危機発生(日本)



昭和47年
排水機場の碑建立
川島排水機場と学島排水機場が相次いで完成し、それを記念して昭和47年には治水の由来を刻んだ記念碑が建立されました。

昭和48年
町内全域上水道
工事完成

上水道の工事は、川島町誕生以来の大事業でした。快晴の青空のもと行われた通水式では、慶祝放水がなされました。



地域に密着した消防団でありたい

消防団の活動は、建物火災をはじめ、水防、山林火災、行方不明者の捜索、そのほか活動の範囲は幅広く、日夜を問わず、いつ何時であろうとも各分団からの出動があり、団員は川島町の安全を守るため常に訓練を重ねています。むかしに比べると、ハード面ではさまざまな設備が導入され、ポンプアップのスピード化が進み、初期消火につながるようになりました。またソフト面では、むかしも今も、団員の礼儀や教育面の指導強化に力を入れて取り組んでいます。

今後は、自主防災組織の拡充をはか

るとともに、いつまでも地域に密着した消防団でありたいと思っています。



消防団団長 横田 満男さん
消防団員になって45年
川島町の安全を守り続けてきました。



昭和48年
学島小学校の改修工事が完了

校舎は鉄筋コンクリート2階建てとなりましたが、正門横の植込み松はそのまま残され、現在も学島小学校のシンボルとなっています。



昭和49年
北海道仁木町と姉妹町
盟約締結

両町民の友好親善を深め、政治経済教育文化の交流をはかる目的で仁木町と姉妹町となる盟約を結び、記念植樹を行いました。

飛躍する町

昭和50年〜昭和59年 町の50年（歩み続ける町の姿）

- 昭和50年 1月 ・川島町教育集会所が完成
- 昭和50年 4月 ・第四代町長に横田徳夫氏が就任
- 昭和50年 12月 ・川島小学校の第二期工事が完了
- 昭和51年 4月 ・乳児保育所が完成
- 昭和51年 7月 ・学島川小規模河川改修事業に着手
- 昭和52年 1月 ・阿波郡、麻植郡、板野郡の七町村で中央広域環境施設組合を設立し、施設の建設工事を開始
- 昭和52年 3月 ・川島小学校の屋内運動場およびプールの新設工事が完了
- 昭和52年 3月 ・隣保館が完成
- 昭和52年 4月 ・第二次農業構造改善事業に着手
- 昭和52年 4月 ・桑村川河川局部改良事業に着手
- 昭和52年 4月 ・農村総合整備モデル事業に着手
- 昭和53年 3月 ・川島東保育所が完成
- 昭和54年 3月 ・学島小学校の屋内運動場が完成
- 昭和54年 3月 ・川島町史（上巻）発行
- 昭和54年 4月 ・城山グラウンドオープン
- 昭和54年 4月 ・横田徳夫氏が町長に再選
- 昭和54年 4月 ・川島東公民館が完成
- 昭和54年 4月 ・中央広域環境施設が完成
- 昭和55年 3月 ・学島幼稚園の新築工事が完了
- 昭和55年 3月 ・川島町商工会館が完成
- 昭和55年 3月 ・上桜公民分館が完成
- 昭和55年 3月 ・保養センター上桜が完成
- 昭和55年 3月 ・立町二十五周年記念式典を開催
- 昭和56年 3月 ・学島小学校の夜間照明施設が完成
- 昭和56年 3月 ・吉本公民分館が完成
- 昭和56年 3月 ・奈良公会堂が完成
- 昭和56年 3月 ・勤労者野外活動施設、レストハウス川島城が落成
- 昭和56年 6月 ・阿波麻植大橋が開通



昭和56年
レストハウス川島城が落成

落成式は、来賓330名、一般観光客およそ1万人の参加によって盛大に挙行されました。また、もち投げなども行われました。



昭和56年
焼肉のたれ販売開始

川島町の特産品であるんにくを使った焼肉のたれが試行錯誤の上完成し、販売を開始しました。

世の中の動き

昭和59年	10月	インド、ガンジー首相暗殺
昭和58年	10月	日本初体外受精児誕生(日本)
昭和58年	9月	大韓航空機撃墜事件
昭和55年	9月	イラン、イラク戦争
昭和55年	6月	東京サミット開催
昭和54年	1月	大学共通一次学力試験実施(日本)
昭和54年	8月	米中国交回復
昭和53年	5月	日中平和友好条約調印(日本)
昭和53年	7月	新東京国際空港開港(日本)
昭和52年	7月	初の試験管ベビー誕生
昭和52年	7月	日本初静止気象衛星「ひまわり」打ち上げ
昭和51年	2月	ヴァイキング1号火星着陸
昭和51年	7月	ロッキード事件発覚
昭和50年	4月	ベトナム戦争終結

昭和59年	10月	第一回川島ふるさとまつりを開催
昭和59年	2月	学西中央公民分館が完成
昭和59年	3月	峯八公民分館が完成
昭和59年	4月	万葉植物園が開園
昭和59年	11月	神後南部公民分館が完成
昭和58年	3月	三ツ島公会堂が完成
昭和58年	6月	学島排水機場のポンプ施設を増強(七トニ台)
昭和57年	3月	川島町史(下巻)発行
昭和57年	8月	第一回川島夏まつり花火大会を開催
昭和57年	10月	農村環境改善センターが完成
昭和57年	10月	川島特産「焼肉のたれ」の販売開始
昭和57年	3月	老人福祉センターが完成
昭和57年	4月	公営住宅近久南団地が完成
昭和57年	9月	第五代町長に須藤利明氏が就任
昭和57年	10月	国営麻植農地開発事業が完了

ぶどうを作り続けて40年

米麦作や養蚕業に代わる何かをと思っていた時に、町の果樹講習へ参加したのがきっかけで、ぶどう栽培を始めました。しだいに生産者が増え、観光ぶどう園を始めました。また、昭和36年からは市場出荷も始め、県農業改良普及所の下楠氏の指導のもと、当時の人気品種マスカットベリーAの栽培にも取り組みました。物を売る難しさはありますが、ぶどう園に来てくださったお客さんの満足が何よりうれしいです。しかし、生産者の高齢化による作付面積の減少や、農作物の多様化、外国産との競合など課題は多くあります。これからも、さまざまな工夫を重ねながら学のぶどうを作り続けていきたいです。

元学ぶどう組合組合長
結城 覚さん
ぶどう栽培歴およそ40年。
学のぶどう栽培の礎を
築いた一人です。



昭和56年
第1回川島夏まつり花火大会開催

今ではすっかり川島の夏の風物詩となっている花火大会は、昭和56年から始められました。

昭和56年
阿波麻植大橋開通

吉野川に架かる17番目の橋として完成しました。開通式では、市場・川島両町長によるテープカット後、渡り初めが行われました。



川島町、充実の時

昭和60年〜平成5年
町の50年（歩み続ける町の姿）



平成元年
町立図書館開館

町立図書館は、生涯教育の町にふさわしく、さまざまな学習の場として幅広い年代に利用されています。



平成2年
カントリーパーク上桜公園完成

9年の歳月をかけて完成しました。開園式では、テープカットの後こけら落としのゲートボール大会が開催されました。

昭和60年 2月
川島町消防団が日本消防協会より表彰

3月
立町三十周年記念式典を開催

4月
立石公会堂が完成

4月
近久児童館が完成

10月
学春日公民分館が完成

3月
城山公民分館が完成

9月
生涯教育の町を宣言

昭和62年 1月
南寺公民分館が完成

2月
山田西公民分館が完成

須藤利明氏が町長に再選

昭和63年 1月
本町公民分館が完成

3月
久保田公民分館が完成

4月
交通安全の町を宣言

6月
川島町長期総合振興計画を策定

11月
保養センター上桜の増改築工事が完了

平成元年 12月
朝日ヶ丘公民分館が完成

1月
川島幼年消防クラブを結成

3月
町立図書館を開館

4月
川島勤労者体育センターが完成

10月
カントリーパーク内に文化の径を設置し、歌句碑を建立

12月
上桜城跡が県指定の史跡に

平成2年 3月
老人ルームが完成

春日住宅公民分館が完成

立町三十五周年記念式典を開催

平成3年 5月
カントリーパーク上桜公園が完成

1月
二ツ森公民分館が完成

3月
西出目公民分館が完成

近久東団地が完成

平成4年 4月
第六代町長に内田昇氏が就任

7月
福祉センター城山が完成

12月
三ツ島老人憩いの家が完成

平成4年 3月
桑村川河川局部改良事業が完成

4月
桑村川第二期小規模河川改修事業に着手

世の中の動き

昭和60年	3月	・ソ連、ゴルバチョフ書記長就任
昭和61年	8月	・日航機墜落事故
昭和62年	4月	・新国民年金制度できる(日本)
昭和62年	4月	・国鉄民営化、JR発足(日本)
昭和62年	4月	・昭和三十九年、平成と改元(日本)
平成元年	1月	・消費税導入(日本)
平成2年	10月	・東西ドイツ統一
平成2年	12月	・日本人初の宇宙飛行
平成3年	1月	・湾岸戦争勃発
平成3年	5月	・雲仙普賢岳噴火災害(日本)
平成3年	8月	・ソ連崩壊
平成4年	9月	・学校週五日制開始(日本)
平成5年	6月	・皇太子ご成婚(日本)

住みよい安全な町づくりを

交通安全母の会では、死亡事故ゼロを目標に、通学路を点検し危険度の高い場所をランキングして、道路交通環境の改善に取り組み、交通事故防止の徹底をはかっています。私は約20年この活動を続けていますが、一番思い出深いのは、学島小学校の運動会で校長先生自ら参加された交通事故防止キャンペーンや、幼児や高齢者に対して参加体験型の交通ルール指導を行うなど、楽しく安全活動や広報活動を続けてこられたことです。

川島町の道路も毎年改良され、通行しやすくなってきたように思いますが、今後も地域ぐるみで交通安全意識の高揚に努め、明るく安全で住みよい地域に発展して行ってほしいですね。

交通安全母の会顧問 鶴田 明美さん
「交通安全は家庭から」を基本理念に、交通安全思想の普及に取り組まれています。

昭和61年
生涯教育の町を宣言

川島町農村環境改善センターにおいて生涯教育の町宣言町民大会が開催され、記念講演が行われました。



●生涯教育の町宣言

わたしたちは、「文化の里 川島

豊かな心とふれあいの町づくり」をめざして、

◎一人一人が生きてよかったといえる

川島をきづくため生涯学習を実践しよう

◎一人一人が幸せを求めて

いつでもどこでも生涯学習を実践しよう

◎一人一人が文化を守り育み

子孫に伝えるため生涯学習を実践しよう

ここに町民とともに、川島町を

「生涯教育の町とすることを宣言します。」

昭和61年9月28日
川島町



平成5年
東四国国体オリエンテーリング大会開催

大会前には県内全市町村をめぐる炬火リレーが川島町でも行われ、期間中は国体史上初のオリエンテーリング大会が開催されました。



平成元年
人権尊重の町を宣言

人権尊重の町宣言大会が川島中学校体育館で行われました。大会後、参加者全員で人権メッセージの入った風船を飛ばしました。

平成5年

- 12月 ・近久第二団地が完成
- 3月 ・生活環境保全林整備事業が完成
- 4月 ・学島川第二期小規模河川改修事業に着手
- 10月 ・東四国国体オリエンテーリング大会を開催

●人権尊重の町宣言

人は、すべて生まれながらに自由と平等であり、人間として尊ばれ、人間として生きる権利を有しています。

お互いの人権を守って明るい社会を築くことが町民すべての願いであります。

基本的人権を尊重し、差別のない明るく住みよい町づくりを実現するため、ここに川島町を

「人権尊重の町」とすることを宣言します。

平成元年12月2日
川島町

新たな道へ

平成6年〜平成15年 町の50年〜歩み続ける町の姿

- 平成6年
 - 1月・城東公民分館が完成
 - 3月・下水道基本構想を策定
 - 東須賀第二団地第一期工事が完了
 - 11月・川島町サミットに参加
 - 消防団第二分団ポンプ車を更新
- 平成7年
 - 1月・立町四十周年オリエンティング大会を開催
 - 4月・川島体協野球部が二年連続優勝(高松宮杯日本軟式野球大会県予選)
- 平成8年
 - 3月・立町四十周年記念式典を開催
 - 4月・神後地区農業集落排水事業に着手
 - 西部農業共済組合が設立
 - 7月・学島小学校プール改修工事が完了
 - 北町老人いこいの家が完成
- 平成9年
 - 2月・徳島中央広域連合が設立
 - 3月・川島中学校ソフトテニス部が全国優勝
 - 6月・川島体協野球部が西日本軟式野球大会準優勝
 - 10月・川島町が法務大臣より表彰
 - 11月・川島町役場新庁舎の建設工事を開始
- 平成10年
 - 3月・川島町役場新庁舎が完成
 - 5月・川島町防災行政無線が開局
 - 川島町本格的OA化、インターネットのホームページを開設
 - 近久墓地移転事業が完成
 - 三ツ島西公会堂が完成
 - 鍛冶屋敷公会堂が完成
- 平成11年
 - 3月・学島郵便局が新築移転
 - 4月・全国最年少、中村健町長(第七代)が誕生
 - 11月・水環境整備事業に着手
 - サントピア公民分館が完成



平成10年
川島町新庁舎落成

勤労者体育センターで行われた落成式では、アトラクションとして学島小学校児童によるしし舞いが披露されました。



平成10年
防災行政無線開局

災害時のみならず、日常の行政事務連絡や町行事のお知らせ、選挙の広報活動など、町民生活に必要な各種情報を伝えます。

世の中の動き

- 平成15年 12月
 - ・自衛隊イラク派遣
- 平成14年 6月
 - ・サッカーワールドカップ日韓共同開催
- 平成13年 12月
 - ・内親王愛子さまご出産(日本)
- 平成13年 9月
 - ・アメリカ、同時多発テロ
- 平成12年 4月
 - ・介護保険制度スタート(日本)
- 平成11年 9月
 - ・東海村臨海事故(日本)
- 平成10年 2月
 - ・長野冬季オリンピック開催
- 平成9年 7月
 - ・香港が中国に返還
- 平成8年 8月
 - ・O157問題(日本)
- 平成7年 3月
 - ・地下鉄サリン事件(日本)
- 平成7年 1月
 - ・阪神淡路大震災(日本)
- 平成6年 9月
 - ・関西国際空港開港(日本)

- 平成15年 3月
 - ・川島町食生活改善推進協議会が発足
- 平成15年 4月
 - ・中村健氏が町長に再選
- 平成15年 7月
 - ・神後地区農業集落排水施設および神後水辺環境公園が竣工
- 平成15年 5月
 - ・三十年ぶりに蒸気機関車が徳島駅〜阿波川島駅を運行
- 平成14年 4月
 - ・神後地区農業集落排水が供用開始
- 平成14年 10月
 - ・交流の広場、コミュニケーションショップが完成
- 平成14年 8月
 - ・「グリーン&ヘルス宣言」大会を開催
- 平成14年 7月
 - ・川島城に隣接して薬草園が開園
- 平成13年 3月
 - ・東児島公民分館が新築完成
- 平成13年 1月
 - ・「川島町ごみの散乱等防止に関する条例」を施行
- 平成12年 9月
 - ・神後地区農業集落排水事業の終末処理場が完成
- 平成12年 3月
 - ・立町四十五周年記念式典を開催
- 平成12年 3月
 - ・消防小型ポンプ付積載車を更新(四台)

町民が健康で暮らせる町を目指して

川島町では、住民の健康づくりのためにさまざまな取り組みをしてきました。平成10年度にはボランティアの方々の協力を得て、「健康づくり協力員」を組織して活動を開始しました。平成15年度からは「川島町食生活改善推進員(ヘルスマイト)」となり「私たちの健康は私たちの手で」をスローガンに地域の健康づくり活動を展開しています。また、平成14年には「健康かわしま21」を策定しました。健康づくりのコツは、同じ問題を抱えている人たちがグループとなり、仲間で実践し継続していくことです。地域でグループを作り、それを根づかせることが大切です。私は保健師として、これからも地域の多くの住民の方々と顔を合わせながら活動を続けていきます。

保健師 水貝 尚美さん

保健師、助産師歴およそ20年。人々の健康を守るため地域に密着したサービスを心がけています。



平成7年
立町40周年記念オリエンテーリング大会

約400名が参加し、小学生、中学生、家族などそれぞれ9クラスに分かれ、東公民館前広場を発着点にタイムを競いました。



平成14年
30年ぶりに蒸気機関車が徳島駅〜阿波川島駅を運行

SL阿波四国三郎号が3日間のみ復活しました。阿波川島駅は、SLを一目見ようという人々にぎわいました。

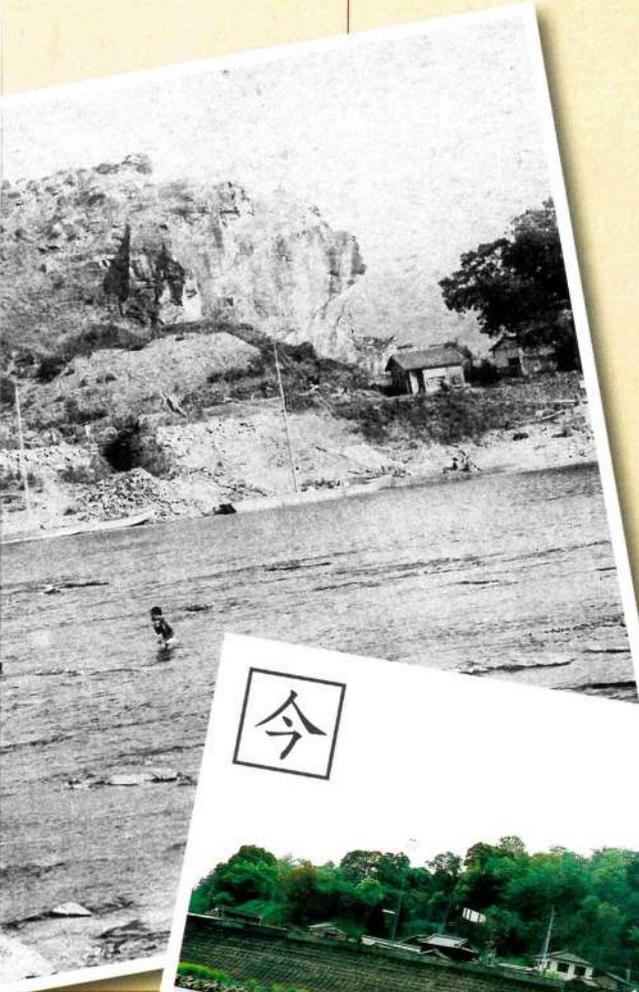


町の50年
歩み続ける町の姿

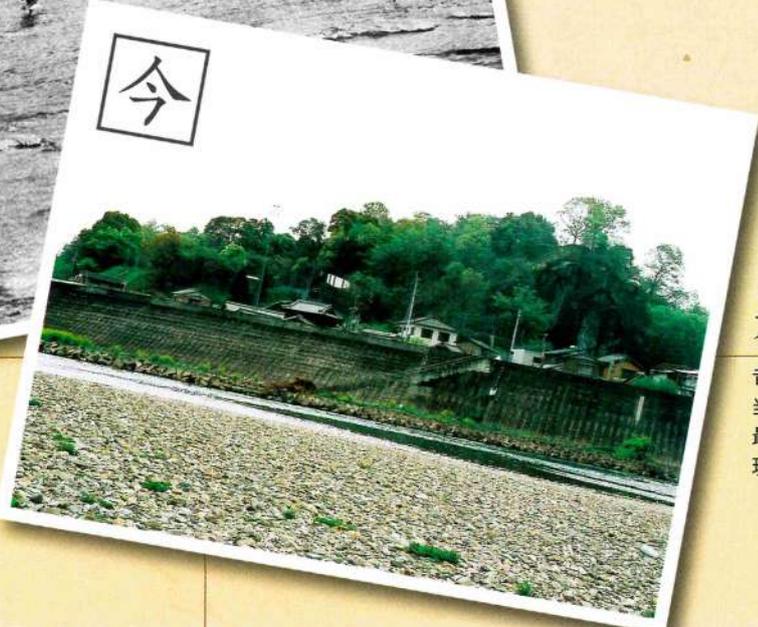
町並今昔

「変わりゆくふるさとの情景」

駅前の様子や学校、吉野川、大正池、道行く人々…
時代の流れとともに、景色は移ろいますが
変わっていくもの、変わらないものが、そこにはあります。



今

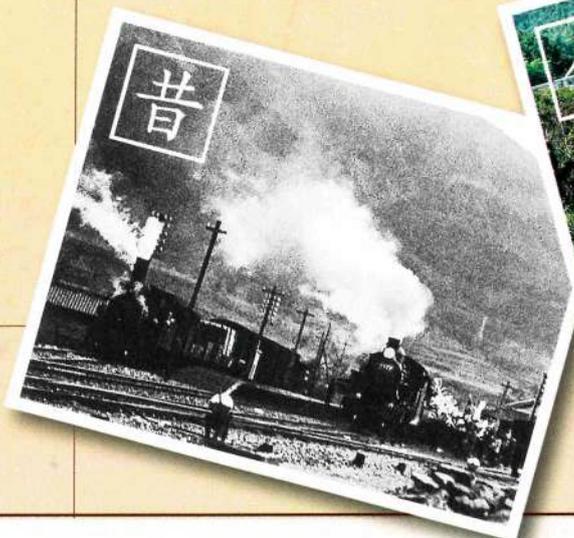


岩の鼻

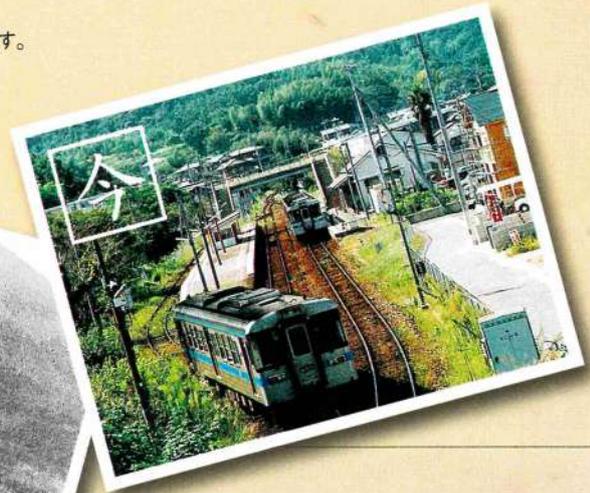
昔の写真は昭和初期の岩の鼻を吉野川上流から眺めたもの。
当時はこのあたり(南岸)が本流で、川島浜が吉野川中流域の
最良港として栄えていた様子がうかがえます。
現在は本流は北へ移り、美しい菜の花が咲き誇ります。

阿波川島駅

昔の写真は昭和19年の阿波川島駅の様子。
昔懐かしいSLが、力強く白い煙を上げています。
平成14年には、30年ぶりにSLが復活し
徳島駅から阿波川島駅までを走りました。

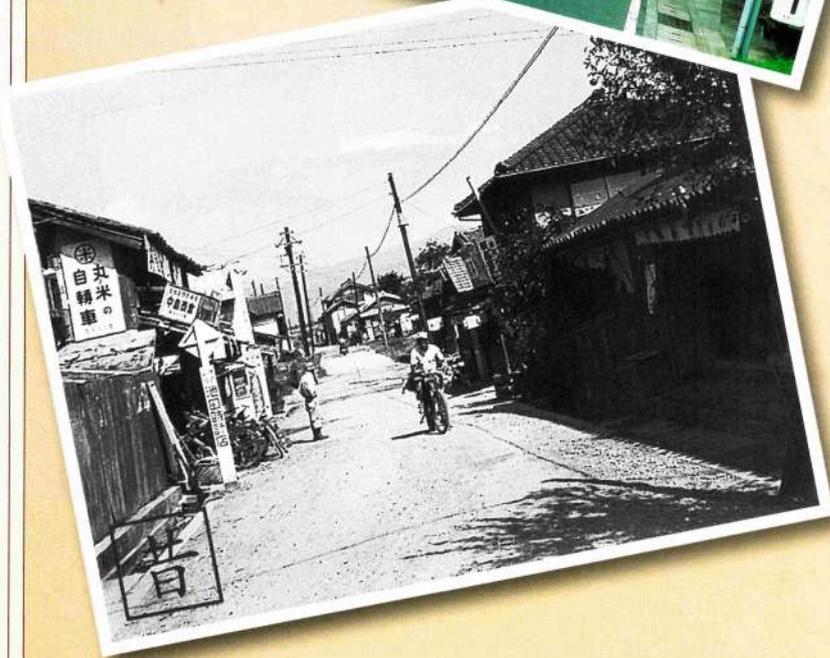
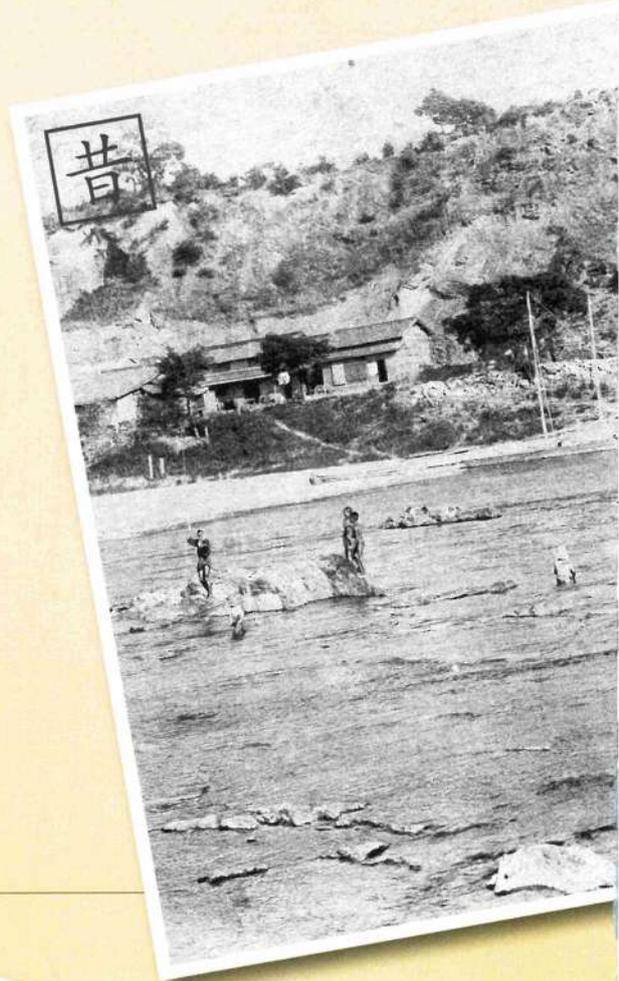


昔



今





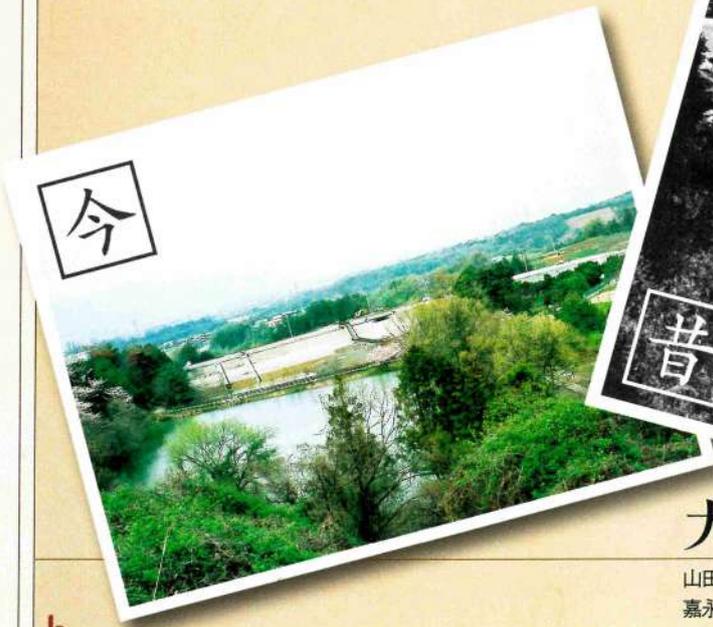
学駅前

昔の写真は昭和30年ごろの市場学停車場線の学駅前の眺め。
 右側には旭亭、お菓子屋さんの誠心堂、
 左側には高橋薬局、市原商店、自転車の中島商会などがあり
 学島地区の中心街でした。



大正池

山田や岡山の台地の水不足を解消するため
 嘉永4(1851)年に年貢取立役・後藤田貞資が提唱し
 1年近くかけて構築しました。
 現在は、景勝の地として人々の憩いの場となっています。





カルガモ

カモの一種。体色はだいたいが褐色。水辺の草地に繁殖し、主に夜間に活動します。夏も日本にとどまり繁殖することからナツガモとも呼ばれています。町内では吉野川筋や、大正池、善入寺島などでも見るることができます。



ナンバンギセル

アジア、マレーシア、インドに分布し、ススキやショウガに寄生します。葉緑体を持たない1年草で、30cmほどの柄の先端に筒形の紅紫色の花を咲かせます。町内では、1カ所のみで、上桜城址の東斜面のカヤに寄生しています。



カンアオイ

山野の樹木の陰に自生する常緑多年生草。根茎は斜めにはい節が多く、葉は根生し深緑色で白斑があります。早春に暗紫色の花が土に接して咲きます。町内では杉林などのやや湿ったところに自生しています。



コウヤボウキ

関東以西の日本の暖地の山に生える落葉小低木。高野山で竹を植えることが禁じられていたため、ほうきの材料として竹の代わりに用いられ名づけられました。町内では万葉植物園内の乾燥した場所、1カ所のみ植生しています。



オミナエシ

日当たりのよい山地などに自生する多年生草。美しい花を咲かせるので、花壇にも栽培されることが多くあります。秋、枝の先に黄色の小花を多数つけます。町内では、みかん畑の畦などに自生しています。

自然豊かな川島町には、私たち人間とともに
たくさん動物や植物が共存しています。
しかし、町が発展するにともなうて数が減少したものもあります。
町内で見られる動物や植物を観察してみましょう。

川島町の 動物・植物

イラスト
図鑑

町にある植物に 関心を持ってほしい



川島町植物愛好会会長

もとき としゆき

元木 利之さん

農業学校林業科を卒業し、県林務課に採用され自然環境関係業務に携わるなどとして、植物に対する興味関心を養われました。

**自然の偉大さ、植物の不思議さは
はかり知れない奥深さに
いつも驚かされます。**

現在の川島町では、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシなどの帰化植物が繁殖しています。反対に、もともと町内に植生していたフジバカマ、オミナエシなどの植物が著しく減少し、絶滅の危機に瀕しているものもあります。このような植物や、町指定の天然記念物であるミミカキグサ、イワヒトデ、桑村王子神社のカシ林について、町民の皆さんに知ってもらいたいですね。

万葉植物園と町内には、万葉集に詠まれた植物およそ150種のうち80種ほどが存在します。川島町植物愛好会は万葉植物園の育成管理のため、平成8年に会員30名で発足しました。月2回の例会では、真鍋佳資氏の指導のもと、植物や万葉集の研究、植物園や薬草園の視察研修などを行っています。例会は新しい発見の場であり、自然の偉大さ、植物の不思議さ、はかり知れない奥深さに私はいつも驚かされています。

平成15年には、万葉植物園内に新たに31種の万葉植物を植栽しました。今後は植物に関心のある人々の研修の場として、小・中学生の社会教育の一環で、万葉植物園を有効利用していただき、より多くの人に自然や植物の大切さについて学んでもらいたいですね。



カワラナデシコ

海辺や原野に自生する多年生草。夏から秋にかけて淡紅色の花を開き、後に小さな種子を含んだ果実をつけます。花が美しいため、愛撫する意味でナデシコと呼ばれます。吉野川の河川敷や堤防周辺などで見ることができます。



スイカズラ

山野、路傍に自生する蔓性の常緑木本。夏、芳香のある白や淡紅色の花が咲き、後に黄色に変わります。子どもが花の蜜を吸うので、この名前がつけました。町内では山地の日当たりのよい斜面で高木にからみ成長します。



アユ

アユ科の硬骨魚で全長約30cm。東アジア、特に日本の名産魚です。稚魚期を海で過ごし、初春に川をさかのぼり、急流にすみます。川島町の吉野川でも、夏になるとアユ釣りを楽しむことができます。

タヌキ

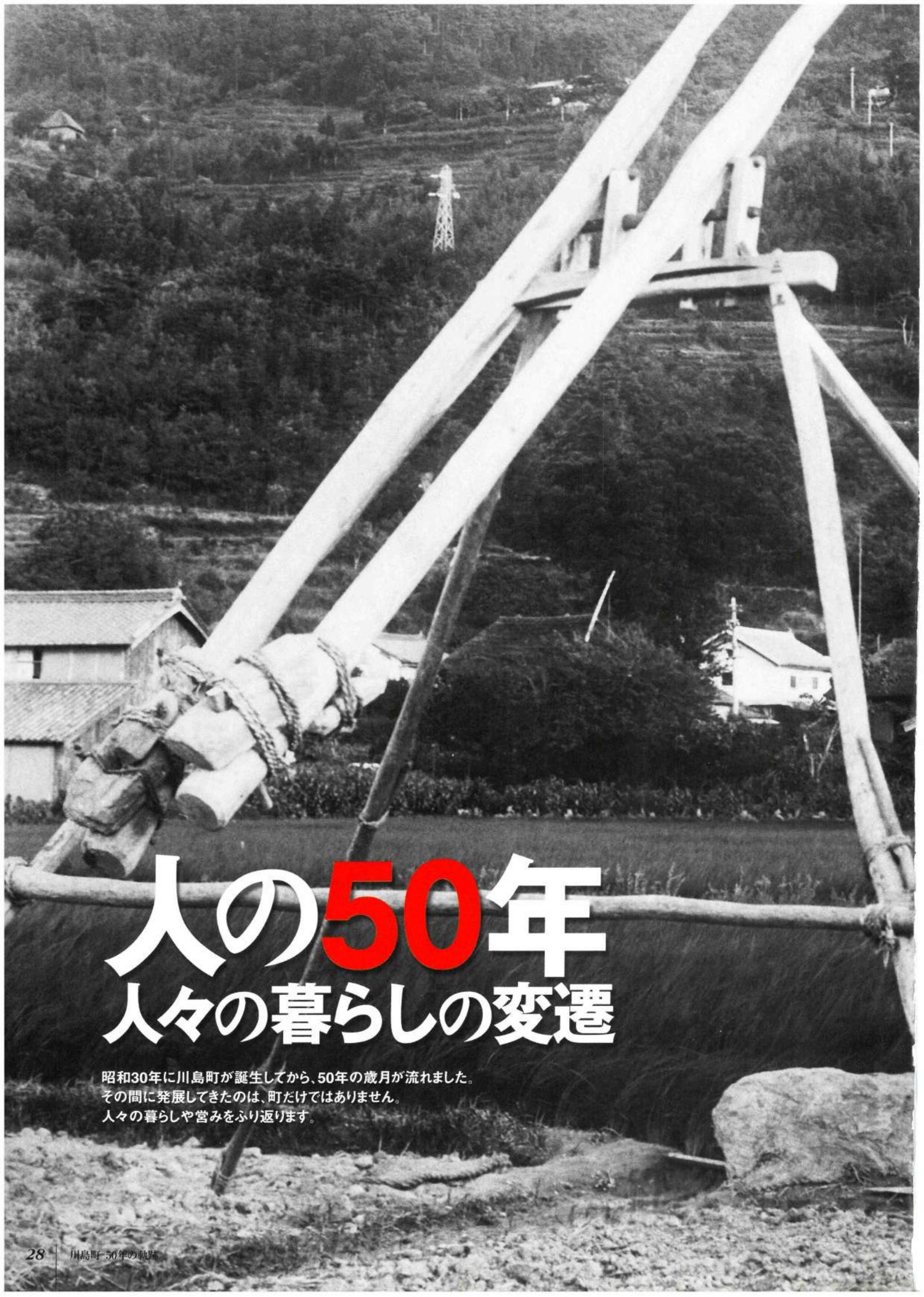
イヌ科のほ乳類で雑食性。山地や草原に穴を作って巣とし、家族で生活しています。夜行性で図太く、民家近くに出没することもあります。古来から人を化かすと言われており、町内にもいくつかのタヌキ伝説が残っています。



移りゆく暮らしの風景
人々の視点から五十年をふり返る。

町が誕生してからの五十年間は、
高度経済成長の波に乗って、
人々の暮らしも大きく変化していきました。
古いものと新しいものが共存し
人々は、温故知新の精神で、
新たな未来を切り開いていきます。

吉本より峯八を望む

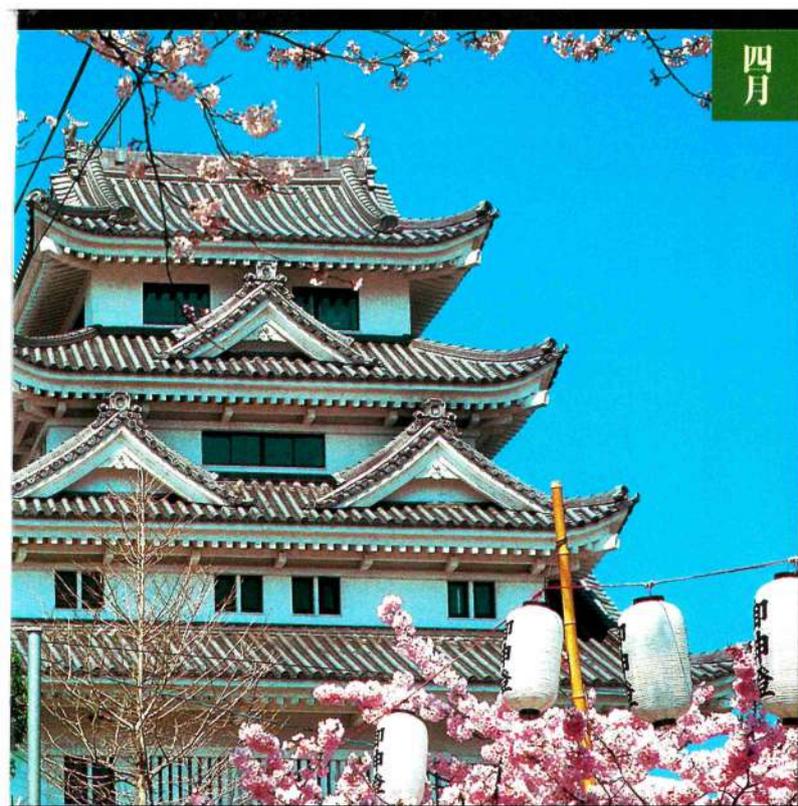


人の50年

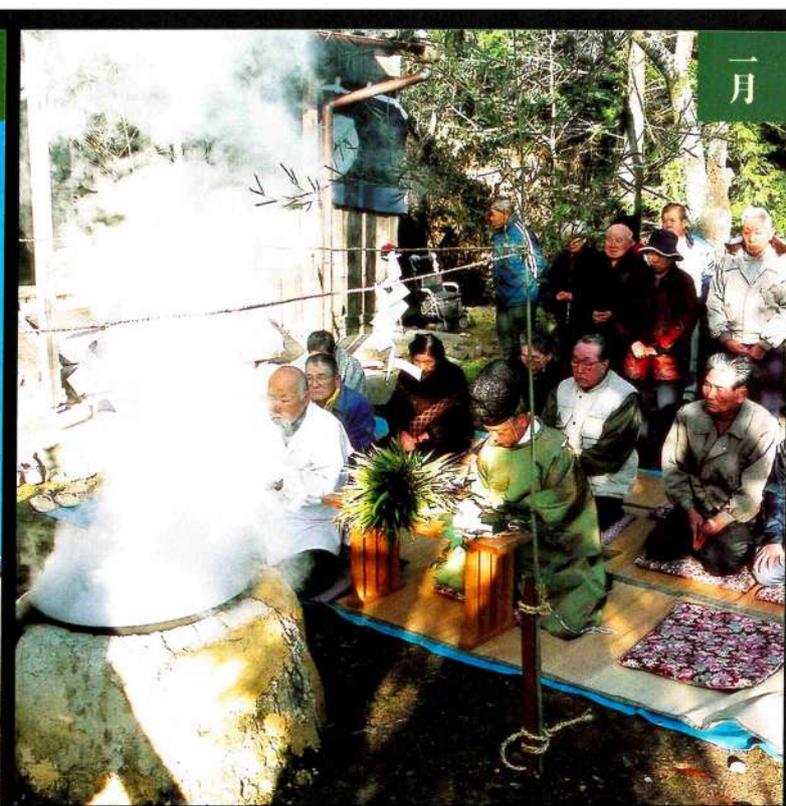
人々の暮らしの変遷

昭和30年に川島町が誕生してから、50年の歳月が流れました。
その間に発展してきたのは、町だけではなく。
人々の暮らしや営みをふり返ります。

四月



一月



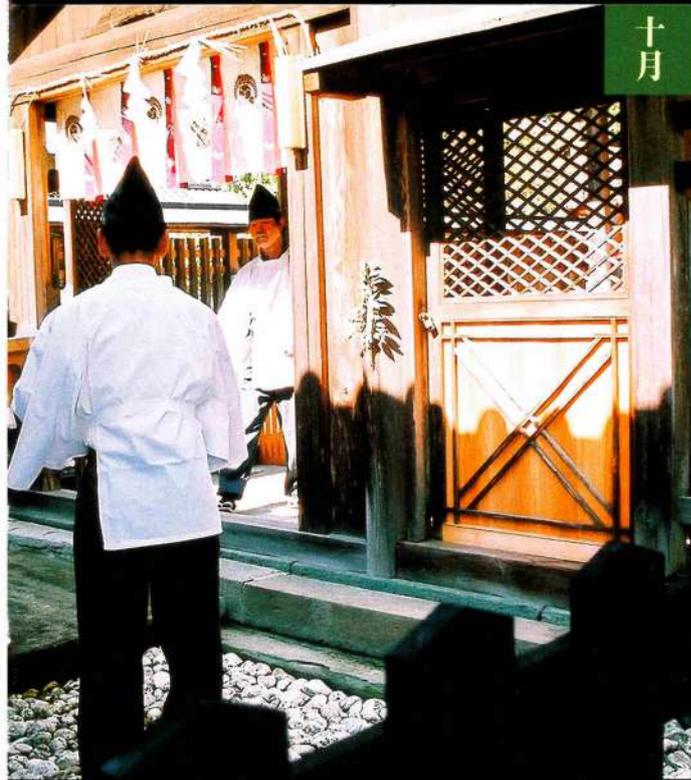
湯神楽 [ゆかぐら]

西出目の八幡神社で、毎年1月9日に行われている神事。煮えたぎる大釜の中に青笹をつけ、平伏する氏子の頭上に湯気を打ちふるって厄を祓い、無病息災を祈願します。

歳時記

川島町の長い歴史の中で毎年繰り返されてきた伝統行事
そして、新たに作り出された数々のイベント
どちらも、大切に受け継いでいきたい町の宝物です。

十月



十月



秋祭り

秋の収穫を感謝し、豊年を祝う秋祭りが町内の各地の神社で行われます。屋台が出たり御輿が奉納されるなど、神の巡幸行事でにぎわいます。

十月



七十五膳の神事

川島神社で毎年10月22日の秋の例大祭で行われる神事。古式にのっとり、海・山・野・川の幸、七十五種を神前に供え、豊作を感謝して氏子の健康を祈願します。

菊花展

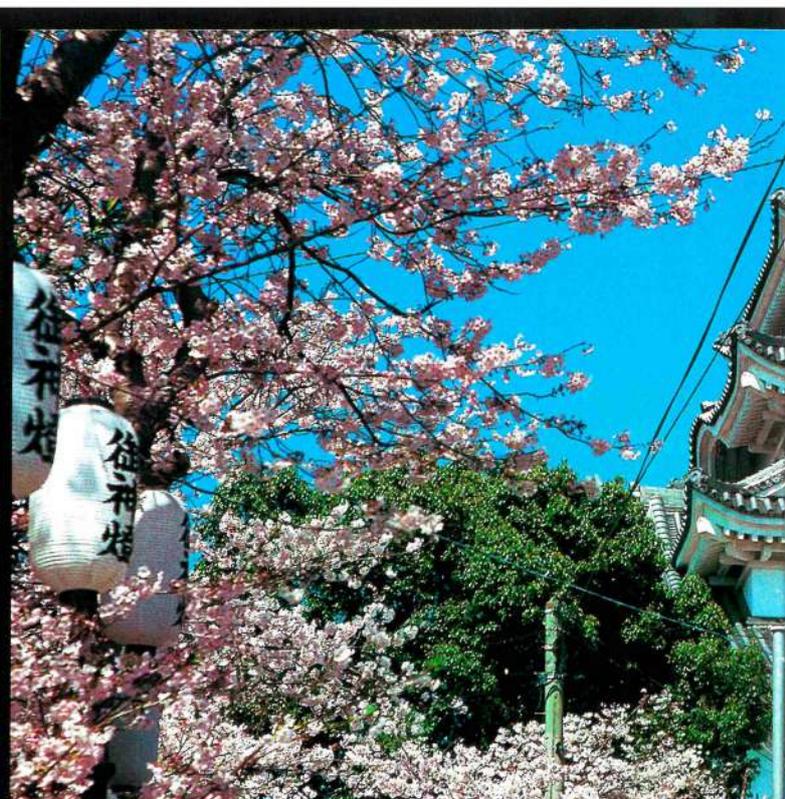
秋の恒例行事である菊花展。丹精込めて育てられた色とりどりの菊が、約1ヶ月に渡って川島城庭園内に展示され、訪れた人々の目を楽しませてくれます。

八月



大花火大会

川島町の大花火大会は、県内でも最大級の規模。毎年8月下旬に川島公園西側の吉野川で開催され、川島城を照らしながら、たくさんの花火が打ち上げられます。



桜まつり

川島町の桜の名所・川島公園やニツ森公園では、毎年桜まつりが開催されます。町内だけではなく、近郊からも大勢の人々が訪れ、花見を楽しみます。

か わ し ま

昔ながらの年中行事

初午(2月)

2月に入っての最初の午の日で、稲荷神社に参拝して商売繁昌、蚤作安定を祈念しました。農家では藪団子(藪の形をした団子)をお供えする家が多くありました。

しかのあく日(3月4日)

雑節句の翌日は、子どもたちは近くの丘や川原へ、大人も仕事を休んで山で花見遊山をします。これが鹿にとって迷惑だということで「鹿の悪日」と言うそうです。

端午の節句(5月5日)

男の子の節句。長男が生まれた家は日本武尊などの絵をかけた幟(のぼり)、次男以下が生まれた家は赤や黒の鯉のぼりを立てて、子どもの成長を祝福しました。

盆小屋(7月13日)

子どもの行事。木、竹、ワラなどを集め小屋を建ててキャンプをし、翌日の夕方には小屋を焼き払います。一斉に焼くことは、雨乞いにも通じる行事と言われていました。

お盆(8月13~16日)

13日には迎え火をたいて死者の霊を迎え、13~15日はごちそうを供えてもてなし、16日の昼過ぎには送り火をたいて送ります。阿波踊りも、もともと死者を供養するためのものでした。

おいのこさん(10月)

10月の亥の日を祝う行事。ゆず、大根、お餅、一升餅に8分目のすしを入れ、来年はいっぱい供えられますようにと祈念します。また、子どもたちが家々をまわり菓子や餅などをもらい歩きました。

十月



ふれあい健康ウォーク

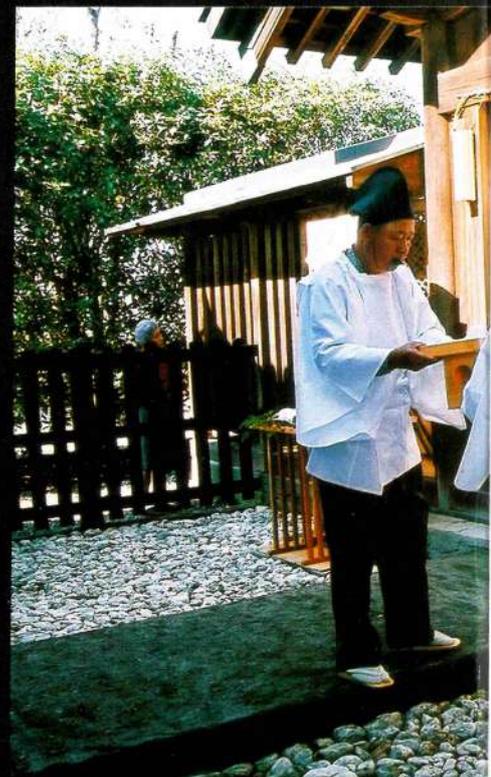
11月に行われるふれあい健康ウォークでは、家族連れや各グループが参加し、みんなで楽しみながら健康づくりに取り組みます。

十月



川島ふるさとまつり

11月上旬にカントリーパーク一帯で開催される川島町最大のイベント。阿波踊り、カラオケ大会、北海道物産市などが繰り広げられ、終日家族連れなどでにぎわいます。

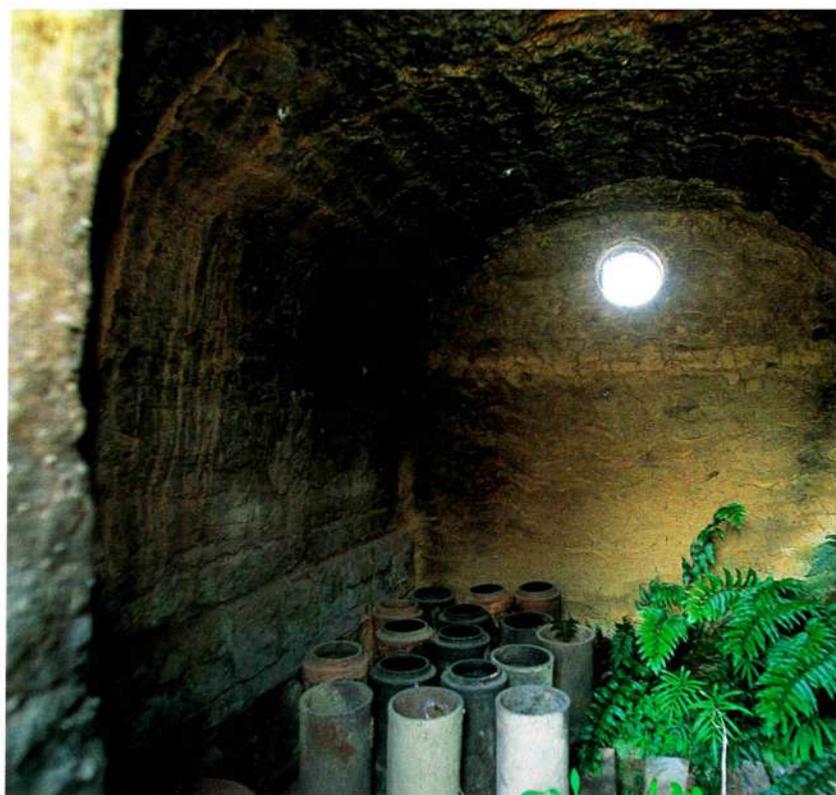


郷土の 伝統

産業

川島焼平窯

近世末期に発祥した川島焼は、しだいに瓦から生活用具へと移行していき、その耐火性から世間の注目を浴びて発展し、窯元も数を増していきました。しかし、世の中の生活様式の変化によって大きな打撃を受け、全盛期は明治末期から昭和10年ごろまでであったようです。



川島焼の 起こりと沿革

川島の山麓からは弥生式土器の破片が多数出土しています。また、古墳からは赤茶けた土師器が、大日寺跡からは布目瓦が多数出土しており、この地では、早くから川島の土を使った土器の生産がなされていたと考えられています。

現在の川島焼は、天保のころ（一八三〇年代）に、森本長次兵衛による瓦の製造から始まったと言われています。そのほかの焼物は万延元年（一八六〇）東方兵衛によって始められ、その子貞吉によって受け継がれ、東焼の名声を博しました。また讃岐人の河津沢太郎は、各地の社寺に傑作を残し、その流れをくむ山下義勝は川島城の天守閣の鯨などを作りました。こうして業者の数は三十軒を超え、川島焼は明治大正期にかけて全盛を極めました。

生活用具

川島焼では土管、植木鉢、貯金箱、おもちゃのどろ面などの生活用具や建築用具、火鉢、かまど、釜、土瓶、ホーロク、こたつ、火消し壺、コンロなど「二度火もの」と言われる耐火性の生活用具が多数生産されていました。二度火ものには、やわらかく細工しやすい「めん土（つち）」が使われていました。

川島焼の鬼瓦

瓦から始まった川島焼ですが、中でも屋根に上げる鬼瓦や鯨（しゃち）などいわゆる「役物（やくもの）」の製作では全国一と評されました。鬼瓦の製造には、「おん土（つち）」と呼ばれる粘土が使われていました。おん土は粒子が粗く腰が強いと言われ、鬼瓦など装飾の細かい製品に適していました。



親から子へ、そしてまた次の世代へ
順番に伝えられてきた

むかしの暮らし、町の移り変わり、ふるさとの伝説…
未来へと伝えていきたい、残していきたい
そんな川島町を保存版として紹介します。

あなたに 伝えたい

川島町保存版

むかしの暮らし

（おいちゃんおばあちゃんが子どものころは）

ふるさと伝説紀行

天気予報の今むかし

郷土愛から生まれた絆
姉妹町仁木町



人口の移り変わり

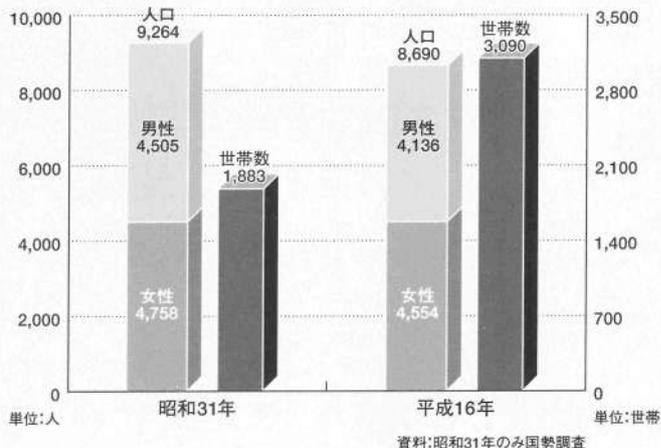
人口は、町の状態を知る目安の一つ。昭和二十年には川島町・学島村の人口の合計が一万百八十八人でした。それが合併した昭和三十年には九千七百六十一人となり、しだいに減少して昭和四十六年に七千四百八人となりました。この背景には、出生数の減少が考えられます。

しかし、その後、少しずつ人口は増加し、八千六百人前後で安定するようになりました。最近の統計では、平成十六年で八千六百九十人となっています。

むかしむかしの暮らし

むかしに比べると、何をすることも便利な現代でも、おじいちゃんやおばあちゃんの話聞いてると今は失われてしまった何かが、むかしはあった気がします。

◎世帯数の増加
昭和31年は人口9,264人で世帯数1,883世帯。平成16年は人口8,690人で世帯数3,090世帯。世帯あたりの人数が減り、核家族の増加が考えられます。

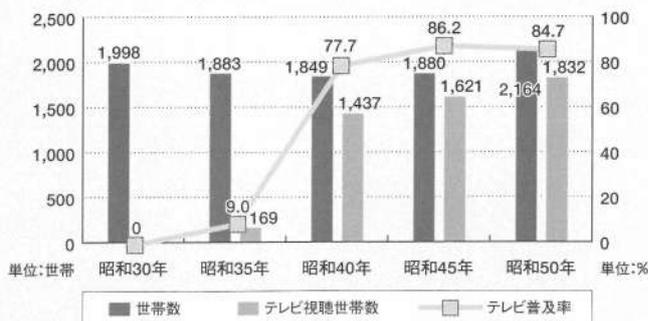


テレビの普及率

今では日常的に見ているテレビですが、川島町に初めてテレビがやって来たのは、昭和三十一年のことでした。それまでは、大衆の娯楽であり情報が早いと言え、ラジオ放送でしたが、テレビ放送は驚くほどの早さで浸透し、ラジオの地位はテレビに取って代わられました。テレビが普及し始めたころは、テレビのある家に近所の人たちが集まり、みんなで見ていたのですが、いつのまにか一家に一台が当たり前となっていきました。

おじいちゃん
おばあちゃん
子ども
の
ころは

◎驚くほどの早さで普及したテレビ
昭和31年に初めてのテレビが入ると、以後驚くほどの早さで増加し、昭和37年までの7年間に1,000台を突破、受信世帯も世帯総数の半分以上を超過しました。



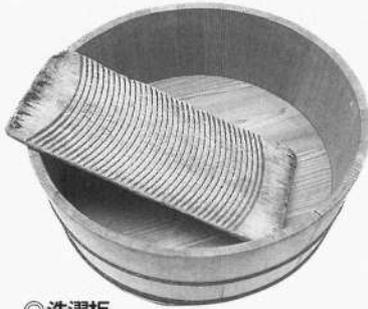
暮らしの道具

時代の変化にともなって、私たちの身の回りにある暮らしの道具も大きく変化してきました。

今では、電気やガスの炊飯器で米を炊きますが、むかしは大きな炊飯用のかまど(くど)で薪を用いるのが普通でした。洗濯も洗濯機ではなく、たらいと洗濯板を使って洗いました。風呂は、長州風呂や五右衛門風呂で、もらい風呂をしているところも多くありました。

暖房用具には、囲炉裏や、木炭を利用する火鉢・こたつなどがあり、しだいに石炭ストーブが普及しました。そして、夏に悩まされるのが蚊。今は網戸がありますが、むかしは部屋の中に蚊帳という大きな網のようなものを吊っていました。

今ではすっかり使われることのなくなったむかしの道具ですが、今でもおじいちゃんやおばあちゃんの家の片隅に、往時をしのびながらひっそりと残っていることがあります。これらの道具からは、むかしの人々の苦労や生活の知恵をかいま見ることができます。



◎洗濯板

今は全自動の洗濯機がありますが、むかしはたらいに水を張り、洗濯板に衣類をこすりつけて汚れを落とし、洗濯していました。



◎火鉢

むかしは電気がなかったため、火鉢の中に木炭を入れて暖を取り、冬の寒さをしのぎました。

建物の変化

農村地帯であった川島町では、むかしから農家は麦わら・かや・よし葺きの一階建ての草屋が普通で、明治末期ごろから大正期になって、二階建て瓦葺きの家が現われ始めました。座敷に畳を敷き詰める家は少なく、わらむしろやかやむしろを敷くのが普通でした。

戦後しばらくすると、しだいに鉄筋コンクリート二階建ての洋式の建物が、川島町の農村地帯にも少しずつ見え出しました。川島町が誕生した昭和三十年代には、官公庁舎が全部と言ってよいほど鉄筋コンクリートづくりとなって面目を一新し、また、街並みの商店などにも鉄筋コンクリートづくりが増えてきました。

去のものとなってしまいました。



現在のJA麻植郡川島支所



むかしの建物(川島農業協同組合)

伝説紀

あなたに伝えたい 川島保存版

「昔々、川島のあるところに…」
伝説の里・川島町には
長い間語り継がれたたくさんのお話があります。

一 狸伝説

下女の辻の狸・七化けおしん



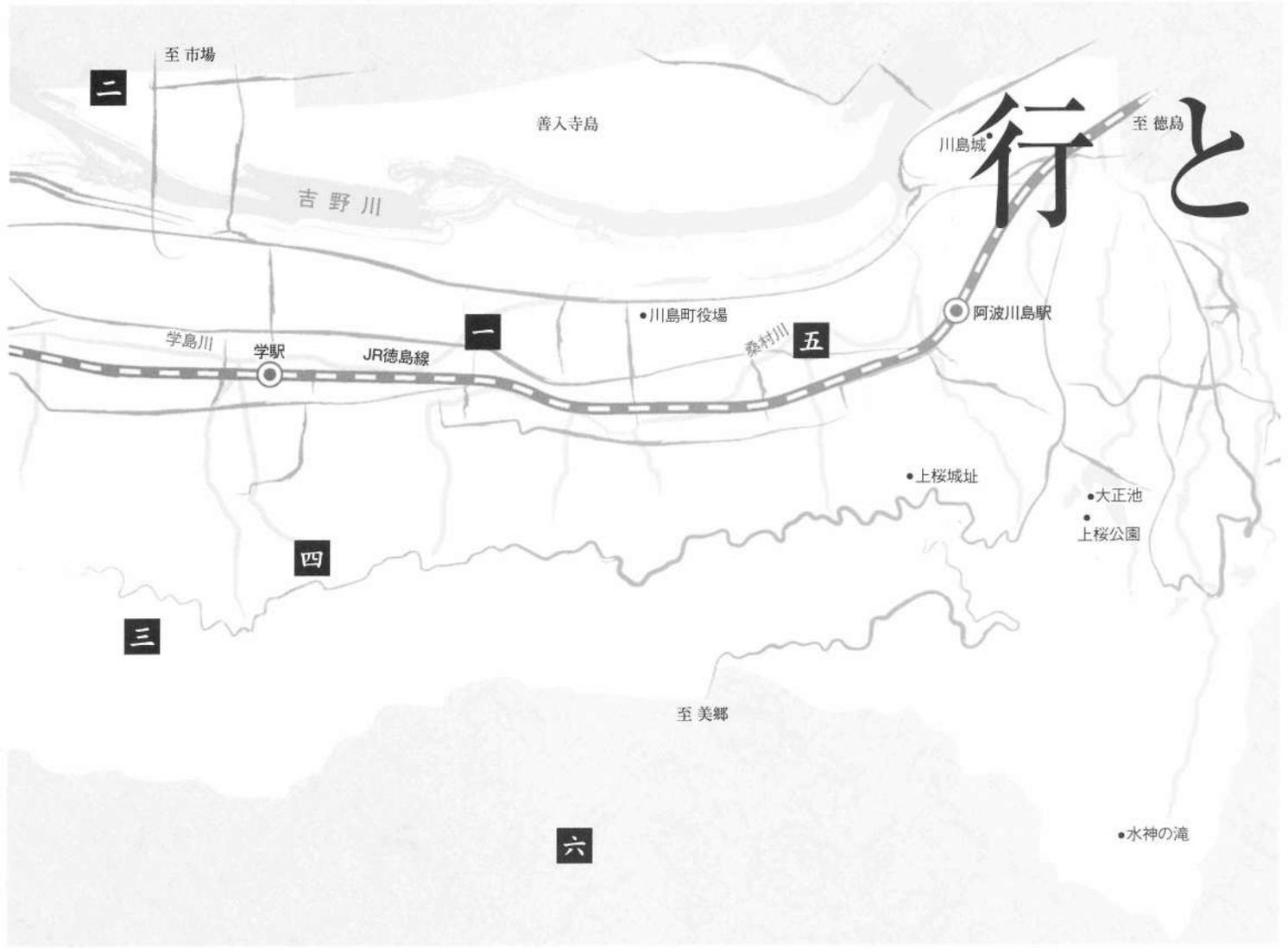
ある年の春、徳島から帰る※デコ舞わしが「下女の辻」で一服していると、藪の中で「七化けおしん」と呼ばれる女狸を見つけた。化けて出てきたおしんにむかい「それでは人間は化かせんぞ」と言っ、自分は木の裏にかくれ、右に左に人形を出した。おしん狸は驚いて、その早

変わりの法を教えてほしいと頼んだが「タダでは教えられん」と言う。すると、どこで工面したのかおしん狸は銭を持ってきた。ところが、デコ舞わしは銭を取り上げるや「この泥棒狸め、どこから盗んできたんなら」と怒鳴りつけた。びっくりしたおしん狸は藪の中へとんで逃げ込んだ。

一年後、このデコ舞わしはまた下女の辻で一服していたが、去年のことを思い出し「長居無用」と立ち上がると、急に大雨が降り出した。アツという間にあたり一面の大水。「助けてくれ」ともがいていたが、気がつくともどこにも大水など出ていない。自分だけコエつぽの中に胸までつかりバタバタやっていたとか。

※デコ舞わし：人形使い

と行



入道伝説

入道須賀の高入道

善入寺島の西のはし、三ツ島の住吉神社の北のあたりは昔はさびしいところで、西香美への渡し場があったが、高入道が出るというので人々に恐れられていた。魚がよく釣れるという雨の晩、ある人が夢中になって釣りをしていたふとふりむくと、雲つくような高入道が目玉をむいてこちらをにらみつけている。びっくり仰天、竿もえものもほつたらかして、逃げ帰って寝込んでしまったという。



高入道は渡し場の小屋に腰かけていることもあり、吉野川をまたいでいることもあるという。気丈な人が「見越したぞ」といふとスーッと消えてしまう。いつのころからか、このあたりを入道須賀と呼ぶようになったそう。

二

巨岩伝説

ゴヤの窪の巨石



薬師寺の上方にある長戸峠から西に約三百メートルのところ、に「ゴヤの窪」という十ヘクタールほどの平地があり、石垣を積みかけたような跡が見られる。

ゴヤの窪とは「高野の窪」のことであり、弘法大師が一夜のうちに大寺を建てようと吉野川から大石を投げ上げた。しかし、天邪鬼が邪魔をして夜中ににわたりを鳴かせたので、大師は夜明けがきたと思いい、一夜の建立をあきらめ、結局、石はそのままに残されたという。

三

大蛇伝説

森池の大蛇

二ツ森の森池は昔は数ヘクタールの大きさで、青々と水をたたえた底の知れない深い池であった。いつのころか、付近の豪農の娘が池のほとりて美男に会い、人目を忍ぶ仲となった。逢瀬を重ねるうちに娘は身こもったが、その男はどのだれかわからない。そこで、男の着物の裾に針をさし糸をつけておいた。翌朝糸をたどっていくと、なんと糸は森池の中に引き込まれているではないか。修験者に頼み、五月五日の節句にしようぶとよもぎを煎じて飲むと、たらいに何ばいも蛇の子が下りたという話である。



四

名前の由来

桑村



桑村地区は町の中心部で、川島町中央商店街や町役場などがある。この地区では、むかしから養蚕がさかんに行われ、桑の木が多かったことから桑村という地名になったと言われている。

もともと町内では、細々ながら養蚕の原料となる桑の木が育てられていたが、明治時代後半に安いインド藍や西洋の化学染料の輸入普及により藍産業が衰え、それに代わって養蚕業がさかんになったそう。

五

名前の由来

麻植【おえ】

麻植郡一帯は古来から大和朝廷に仕える忌部氏が土地を開き、阿北文化の中心となっていた。

大和朝廷における忌部氏の職務は神事を執行することで、この忌部氏の阿波における部曲(私有民)は、木綿や麻布を作ること(私職)とし、大嘗祭(天皇即位の時に)行う神事においてこれらを納めていた。

そのため、麻植郡にはむかしから麻がたくさん植えられ、このことが麻植の由来ではないかと言われている。

六



至 池田

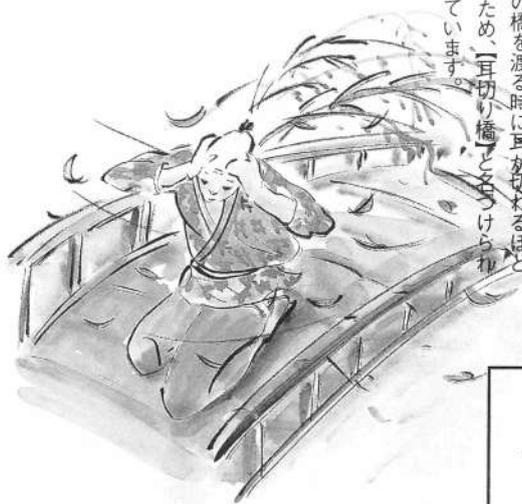
鳶ヶ巣の出別れ雲

南西から出た雲が、山にさえぎられて南からの風の影響が少ないことを「鳶ヶ巣の出別れ雲」と言い、台風や暴風雨が接近している知らせと知られていました。



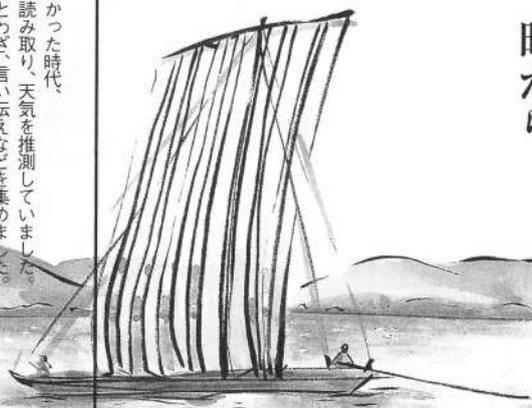
耳切り橋

城山にはむかし小橋がありました。堤防ができるまでは冬に西よりの川風が吹きつけて、この橋を渡る時に耳が切れるほど冷たかったため、「耳切り橋」とさうつけられたと言われています。



風とお医者は十時から

昼の海風と夜の陸風が交代する時、風がとだえる朝風と夕風がありました。海風や陸風を利用して吉野川を上下する帆掛船の船頭仲間では「風とお医者は十時から」と言われていたそうです。

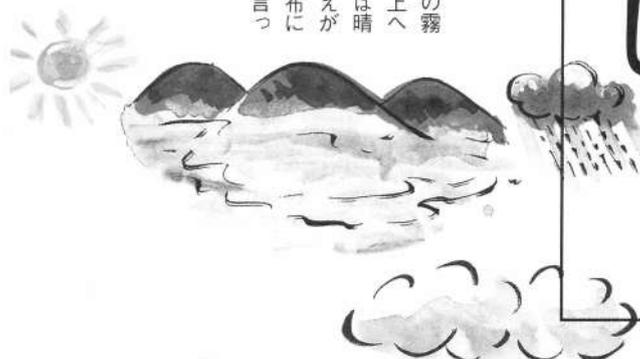


天気予報の 今むかし

現代のようにテレビも新聞もなかった時代、人々は雲や風などの変化を自ら読み取り、天気を推測していました。川島町の気象や天気に関することわざ、言い伝えなどを集めました。

高越の腰布

今朝に、高越山のふもとの霧が西へ動けば雨が降り、上へ上って丸くなり東に飛べば晴れになる、という言い伝えがありました。この霧を腰布に見立て「高越の腰布」と言っていたそうです。



池田・白地のすき焼きの おいがする

川島町に吹く風の多くは、四国山脈や吉野川に沿って吹き、特に冬は西よりの川風が強くなります。このことから冬の夕方になると「池田・白地のすき焼きのおいがする」と言っていたそうです。



ほかにも【種徳山の夕立は待つことなし】【石鎗山からの雲は雷鳴強い】【日開谷の夕立で待ちぼうけ】などがあります。科学的根拠があるわけではありませんが、長年に渡る庶民の経験から生まれたものであり、当たる確率が高いかもしれません。



1834~1915



徳島県立文書館提供

郷土愛から 生まれた絆 姉妹町 仁木町

COLUMN
Takekichi Niki

～仁木町と仁木竹吉～

北海道仁木町

仁木竹吉【にき たけきち】

天保5(1834)年善入寺島の一部である学島村児島に仁木源左衛門の二男として生まれました。41歳の時に北海道移住の志を立ててからは、村民の移住のために奔走し、北海道仁木村でその生涯を閉じました。

改修工事が行われる以前の吉野川流域は、幾たびも水禍に見舞われ、農作物は育たず、人々は生活に苦しんでいました。善入寺島に生まれた仁木竹吉は、わが身をもってこの貧窮を体験していたため、人々を救うには北海道に新天地を求めるほかないと決意し、その生涯を村民の北海道移住のために捧げたのです。

明治八年、四十一歳の時に北海道移住の志を立てた竹吉は、上京して黒田清隆開拓使に会い、その志を述べました。そして熱意が認められ、黒田開拓使の一行にともなって北海道に赴きます。北海道で調査を重ねた竹吉は、後志国余市郡の大川に沿う肥沃な原野を発見し、ここに移住する決心を固めました。そして、移住に必要なさまざまな物資の交付を懇願し、四年後に開拓使庁から許可されました。

明治十二年十一月、最初の入植者として百十七戸、四百八十人が北海道にやってきました。春を待って、開拓使庁の技師らとともに道路や畑の整備を行い、入植地はしだいに安定していききました。そこで、竹吉はさらに入植者を募集し、明治十六年に新たに八十戸が入植しています。しかし、農産物の暴落や入植者の利己心の芽生えなどから開拓が頓挫しそうになりました。竹吉は再建に取り組み、三井物産との提携を実現しました。三井物産から田を

担保として貸付を受け、代わりに三井物産が仁木村の農産物を一手に引き受け販売することになったのです。この結果、入植者の生活もしだいに安定していききました。このような村の盛衰を見守りつつ、竹吉は大正四年、仁木村において八十二歳の生涯を閉じました。

そして昭和四十九年、川島町は仁木町と姉妹町の調印を交わしました。それ以来現在に至るまで、さまざまな交流が活発に行われています。昭和五十四年には開基百年記念事業の一環として、川島町訪問研修団が仁木町を訪れ、交流の輪を広げました。ゆかりの地交流事業としては、毎年夏休みに仁木小学校の子どもたちが川島町を訪れ、友好を深めています。また、毎年仁木町で行われる町民運動会では阿波踊りが披露され、今や仁木町の風物詩としてすっかり定着しています。



仁木町との交流



姉妹都市盟約書



仁木町との交流

ふるさと 地区自慢

山田地区の自慢は自然がいっぱいあるところ。春夏秋冬、季節ごとにあらゆる花を楽しめます。町名勝に指定されている水神の滝は、夏はたいへん涼しく散歩コースに最適です。また、この地区は少し高台になっているので、北に吉野川を見渡すことができます。

大人も子どもも一つになって楽しむ夏祭りの二十六夜祭、みこしが練り歩く秋祭りなど、地域の方々とふれあえるイベントもたくさんあり、家族そろって参加しています。



山田地区【やまだちく】

石川 房夫さん

山田地区に住んで13年余り。県西部の出身ですが、山田は私の第2のふるさとです。

川島地区

山田地区

桑村地区

私は、小さいころから慣れ親しんだ歴史的にも古い町・川島地区の風景が大好きです。ヤモリがたぐさんいた城山の池、桜のころピンク色になる城山、魚釣りについていって遊んだ石畳、タンポポやツクシを摘んだ土手、吉野川を見下ろす岩の鼻、季節ごとに変わる山の色、そして、何より好きなのは、ここに暮らす人たちの気安さですね。至るところにきれいな花が咲き、そこで足をとめて世間話に花を咲かせている風景にも心が和みます。



川島地区【かわしまちく】

山本 あきさん

まだまだ知らない川島がいっぱい。子どもたちにも、ふるさとのよさを伝えたいですね。

桑村地区は、のどかな田園地と静かな住環境からなり、散歩コースにも最適です。また、このあたりは遍路道となっています。いたわりつつ歩く夫婦連れ、足どり軽い外国人、一人寡黙に歩く人、同行二人、歩き遍路の表情もさまざまです。善入寺島をのぞみ、吉野川にかかる潜水橋を眼下に土手を行く白装束の姿を見送っていると、しばし明治の世になった錯覚に陥ります。さわやかな初夏の日には、孫たちを連れてお接待に出かけます。



桑村地区【くわむらちく】

中西 充子さん

遍路道を行くお遍路さんとの出会いが楽しみ。一期一会を大切にしています。



学島地区 【がくしまちく】

長野 徳治さん

この地区の1番好きなのは、むかしながらの人情が残っているところです。

学には古い歴史があり、忌部族の学問所があったと伝えられ、了慶寺の僧侶が子弟を育てたことから学の地名が有名になり、学駅の入場券は全国的に受験のお守りとして人気を博しています。また、韋八には貴重な猪垣の碑があり、近くには忌部山形の古墳跡も見られます。また、ぶどう狩りも自慢の一つで、戦後のアイデア産業として観光客を集め、新鮮さと味を求め、る人でにぎわっています。



児島地区 【こじまちく】

庄村 房子さん

静かで、自然が多く、歴史あるふるさと・児島が大好きです。

北海道開拓に尽力した仁木竹吉や、本居宣長の門人である阿部勝士郎、児島須賀に私塾を開いた大島梅隠など、数多くの偉人を輩出していることが誇りです。また、地区の中心部を通っている旧伊予街道の両側には商店が建ち並び、むかしはとてもにぎやかなところでした。西部にはお地藏さんがあり、毎年八月二十四日には夜市が立って、お参り客でにぎわい、お堂内では地区の老人たちが鈴を鳴らし、哀愁を帯びた声でご詠歌をよみあげていました。



三ツ島地区 【みつしまちく】

菅 正和さん

仕事で長期出張が多いのですが、帰るたびにこの地区の変わらない情景にほっとします。

地域の生活をずっと見守り続けている住吉神社こそ、三ツ島地区の誇りだと思います。室町時代に創立されたといわれている格式高い神社で、その歴史を表すかのよう境内には大木が生い茂っています。大晦日からは元日にかけての初詣や祭りの日には、たいそつなにぎわいで、むかしから地域の交流の場として活用されてきました。むかしからここで生活してきた人々の心の中には、住吉神社でのなんらかの思い出が必ずあると思いますよ。



50周年記念
座談会

「世代を越えてつなぐ思い」

未来に届け! 川島の志

20代から70代までの幅広い世代の視点で、川島町の50年をふり返り
町の魅力や残していきたいところを再認識し
そして、これからの町と地域のあり方を考えます。

- ◆町長 本日は、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今日は皆さんとともに川島町の50年をふり返り、町のこれからのを考えていきたいと思えます。どうぞ、よろしくお願ひいたします。では、お一人ずつ自己紹介をお願いします。
- ◆市原 社会福祉協議会に勤めております、市原恵里です。住んでいるところは川島町学です。生まれてからずっと川島で生活しています。
- ◆阿部 阿部松山と申します。出身は西尾島地区で、私の家はもう何代か川島に暮らしています。趣味は郷土史の調査です。
- ◆祖父江 祖父江宏江と申します。山川から昭和二十五年に川島へ嫁いでまいりました。結婚して今年で五十二年になります。生活改善グループの会長をしております。
- ◆近藤 近藤幸で申します。徳島市から川島町に昭和二十八年に嫁いでまいりました。社会福祉協議会でボランティア活動をしたり、婦人会の副会長などもさせて頂いております。
- ◆新居 新居博文と申します。生まれは大阪ですが、もともと両親が学の出身だったため、小学二年の時に川島町へ引越してきてからはずっとここに住んでいます。
- ◆町長 私は平成十年に川島町に引越してきました、十一年から町長をさせて頂いております。川島町に住むようになってまだ六年ですが、皆さんにいろいろなことを教えていただきながら仕事をさせて頂いております。十月の合併にむけ、がんばっていかうと思っております。

町並み、水害、暮らし 町の歴史をふり返る

◆町長 阿部さんは、子どもの時からずっと川島で生活されていますが、昔と比べると川島ってどんなふうに変わってきましたか？

◆阿部 川島は、江戸時代の阿波国五街道の一つである伊予街道の両側を中心に栄えたところです。私が小さい時から戦後くらいまでは、街道沿いに店が並んでいましたが、それが段々と少なくなってきましたね。

◆町長 近藤さんが徳島から来られた時の川島はどうでしたか？伊予街道が中心で、ほかの地区には住宅はまだなかったですか？徳島と川島の違いはありましたか？

◆近藤 街道周辺以外にも城下町でしたから住宅はありました。そのころには、バスの停留所が駅前であり、神後には官公庁が集まっていましたね。徳島とは全然違いましたよ。農村地域での女性の地位の低いこと！私は兼業農家に嫁いなのですが、とても封建的だったと思います。なじみまでは大変でした。でも、川島は景色がきれいでしょ。駅で降りたら緑が目飛び込んできて、なんてすばらしいところなんだろうと思いましたね。

◆町長 新居さんが大阪から引越されてきた時はどうでしたか？

◆新居 まず驚いたのが、大阪の小学校にはプールがあったのに、学島小学校にプールがなく、学島の潜水橋のところで水泳をしていたことです。学島小学校には、私が小学四年くらいの時にプールができました。小学校の卒業生の方々が募金などさしてできたのですが、いろいろな先輩や大



新居 博文

46歳。川島地区在住。川島町役場職員であり、川島小学校PTA会長。2児の父親でもある。

市原 恵里

26歳。学地区在住。川島町社会福祉協議会職員。生まれてから今日まで川島町で暮らされている。



中村 健

32歳。平成11年4月に全国最年少町長として川島町第7代町長に就任。以来川島の町づくりに尽力されている。

人の人ががんばってくれたからプールができたんなあ、という思いは子どもながらに鮮烈にありましたね。

◆町長 市原さんは、子どものころと変わったなあと思うところはありますか？

◆市原 私の場合は、新しい庁舎の完成が一番印象的です。学の出張所を利用していたので、昔の庁舎には行ったことがありませんでした。新しい役場ができて「ああ、これが役場なんや」と思いましたね。

◆町長 川島の歴史といえば、水害が思い浮かぶ方も多いと思うのですが、どうでしょう？

◆阿部 昭和二年に吉野川河口(徳島市)から山川町船戸までの約四十キロメートル間に連続堤防ができるまでは、台風が来たら大変だったそうです。児島地区は土地が低いから、学島川などの水が流れてきて、ところによっては水が軒まできていたそうです。今でも、当時の名残で石積みの高さのある家が残っているでしょう？桑村川・学島川の改修工事が完成するまでは水には相当苦労していましたね。

◆近藤 そうですね。台風が来るたびに出水に悩まされましたね。大水の時は、消防団の方たちがカンドリ舟で救急食を配ったりしてくださったんです。線路も水でいっぱいになって、汽車もそろそろと走っていました。あと、畳はぬれたらなかなか乾か

「大水になると カンドリ舟でお弁当を 配っていたんです」

ないので、上へ上へ積み上げていましたね。

◆新居 私は阿部さんや近藤さんほどの経験はありませんが、水の怖さというのからはだいぶ改善されてきたのではないのでしょうか。

◆町長 川島町の五十年をふり返ると、公民分館や図書館・改善センター・勤労者体育センターなどができて、いろいろ変わってきたと思うのですが、施設にまつわる思い出などはありますか？

◆祖父江 公民館がなかった時代は、私の地区では、みんなが山に入って木材を切ってきて、自分たちで公民館を建てましたよ。

◆阿部 私は昭和三十八年に結婚したのですが、公民館で結婚式をしました。もともと昔は家でしている方もありましたけれど、私の時代には公民館でする方も多かったですね。

◆町長 冠婚葬祭にも公民館が使われていたんですね。

◆祖父江 公民館でしている活動といえは、助け合い

講というのがあります。昔はひと月百円から借りられたんです。今はひと月一万円からですけれど、私は三年目くらいからこの講の事務をしていました。お金がたまると、後で皆さんに配分するんです。川島町と同じでちょうど今年で五十年、今も続いています。頼りになる庶民の金融機関ですね。

50周年記念 座談



未来に届け！ 川島の志

「世代を越えてつなぐ思い」

未来へと残していきたい 川島の魅力を再発見

◆町長 川島町の歴史をふり返っていた
いただきましたが、では、町の魅力や町の誇り、
将来に継承していきたいことなどはありま
すか？

◆市原 私が残して行ってほしいなあと思
うのは、ふるさとまつりなどのイベント
です。ほかには、老人会の人や幼稚園児と
交流したり、小学校に行って昔の遊びを教
えたりしているので、そういう活動も続け
ていけたらいいんじゃないかなあと思いま
す。あと、コンビニやスーパーができて発
展している町もありますが、川島は今ま
まののんびりした川島であってほし
いです。今の町を崩さないように、なおか
つ発展していきたいなと思います。

◆祖父江 私は焼き肉のたれを残してい
きたいです。作り始めて今年で二十五年に
なるのですが、最初のころは、自宅で試作を
したりしていました。ここまで普及できたの

「清きよき流れの 吉野川市という名に恥じない 人づくりを継承したい」



阿部 松山

68歳。児島地区在住。川島町選挙管理委員会委員であり、民生委員。川島町の歴史に造詣が深い。



近藤 幸

73歳。川島地区在住。川島町婦人会副会長。ボランティア活動などにも積極的に取り組まれている。



祖父江 宏江

78歳。桑村地区在住。生活改善グループ会長。町の名産である「焼肉のたれ」の普及に貢献された。

は、にんにく農家をはじめ、たくさんの方のおかけです。これからは、焼き肉のたれだけでなく、加工をするなど工夫して、にんにくをもっといろいろなことに活用できれ
ばと思っています。それと、にんにく特有
のにおいもあってなかなか難しいですが、
後継者も育てていきたいですね。

◆町長 川島町の特産品といえは、焼き
肉のたれですよ。川島ブランドとして、
今後も続けていっていただけたらと思いま
す。

◆近藤 川島の生徒さんがほんとに行儀
いいですね。登校の時など、おはようござ
いますとあいさつをしてくれます。これか
らまああいう子どもたちでいてほしいです
ね。あと、川島城・上桜周辺・チェリーライ
ン・温泉などを残していつてもらいたい
です。これらを点でなく線で結んで史跡めぐ
りを取り入れながら、癒しの道と位置付け
て整備をしていけばどうでしょうか。

◆阿部 そうですね。案内板や石碑を建
ててハイキングをすれば、健康の増進にも
なり、地元の歴史の勉強にもなりますしね。

地元のことを知ってもらい、自分の生まれ
た町に自信を持てる人を育てていければと
思います。また、郷土の先人に誇りや憧れ
を持ち、さらには目標とし、日本や世界で活
躍するような人が川島から出たらいいい
ですね。

◆新居 城下町の豊かな文化を残してい
けたらと思います。役場の職員の名刺にも
川島城が刷られていて、名刺を渡す時にも
お城のある町なんですよという言い方をし
ます。城のある町という思いが町民の皆さ
んの中にもあるのではないのでしょうか。ほ
かには、生涯教育の町宣言をしましたが、
施設も大切だけれど、心を残していけたらと
思います。モノだけじゃなく、心と心のつ
ながりやふれあいを残していきたいですね。

◆町長 若い方にも自分の地域にはこう
いう人がいて、先祖はこういう生活をして
きて、そして自分があるという歴史をきち
んと認識してもらい、吉野川市にむけて、
川島町のすばらしい人づくりを継承してい
きたいですね。



地域のこれからと 合併後の町を考える

◆町長 市原さんは福祉の面から川島町のこれからとか、吉野川市のこれからについてどう思いますか？

◆市原 社会福祉協議会の中に川島町のボランティア協議会があり、一人暮らしの高齢者の方をお呼びして月に一度食事会をしたり、安否確認も含めたお弁当の配食サービスなどをしています。在宅福祉の面などでも、合併後のことを皆さん心配されているのですけれど、今やっているよいことは、吉野川市になっても続けていけるように努力していきたいと思います。

◆町長 川島町の社会福祉協議会という

のは、合併する四カ町村の中でもボランティア活動が盛んですから、ぜひ、続けていってほしいですね。新居さんは、PTAという立場から、子どもたちの未来や人材育成についてどう思われますか？

◆新居 昔はケンカしても謝ればすむことを、今の子どもはとことんやっつけてしまつ。大人も子どもも昔とは変わってきています。私が子どものころは、近所の人に叱られたり話しかけられたりする中で、社会のルールや隣近所の大切さを地で学んできたと思うんです。地域の大人たちは、子どもたちに、もつと声をかけていくようにするべきだと思います。十月には吉野川市に変わりますが、川の流れは豊かな実をばくくみますし、清きよき美しい流れは人の心に通じます。吉野川市という名に恥じないように、学校教育も社会教育も進めていってほしいと思います。

◆町長 近藤さんは婦人会の活動を通してどう思われますか？

◆近藤 今現在というのは孤独の「孤」、それから個人の「個」の時代だと思っています。でも、それではさびしい。人間どうしのつながりがある社会にしていきたいですね。ですから、女性の皆さんも一歩踏み出して、もつと社会活動に参加していただけたらと思います。婦人会もだんだん高齢化が進み、若い人たちが少なくなりつつあるのが現状です。PTA活動が終わったら婦人会などに入っていたらいいですね(笑)。

◆祖父江 川島町では生活改善グループをはじめ、公民分館などを利用したいろいろな活動が活発に行われてきました。近藤さんがおっしゃったように、そのような振興会の活動を通じた人と人のつながりを吉野

川市になっても大切にしていきたいと思えます。

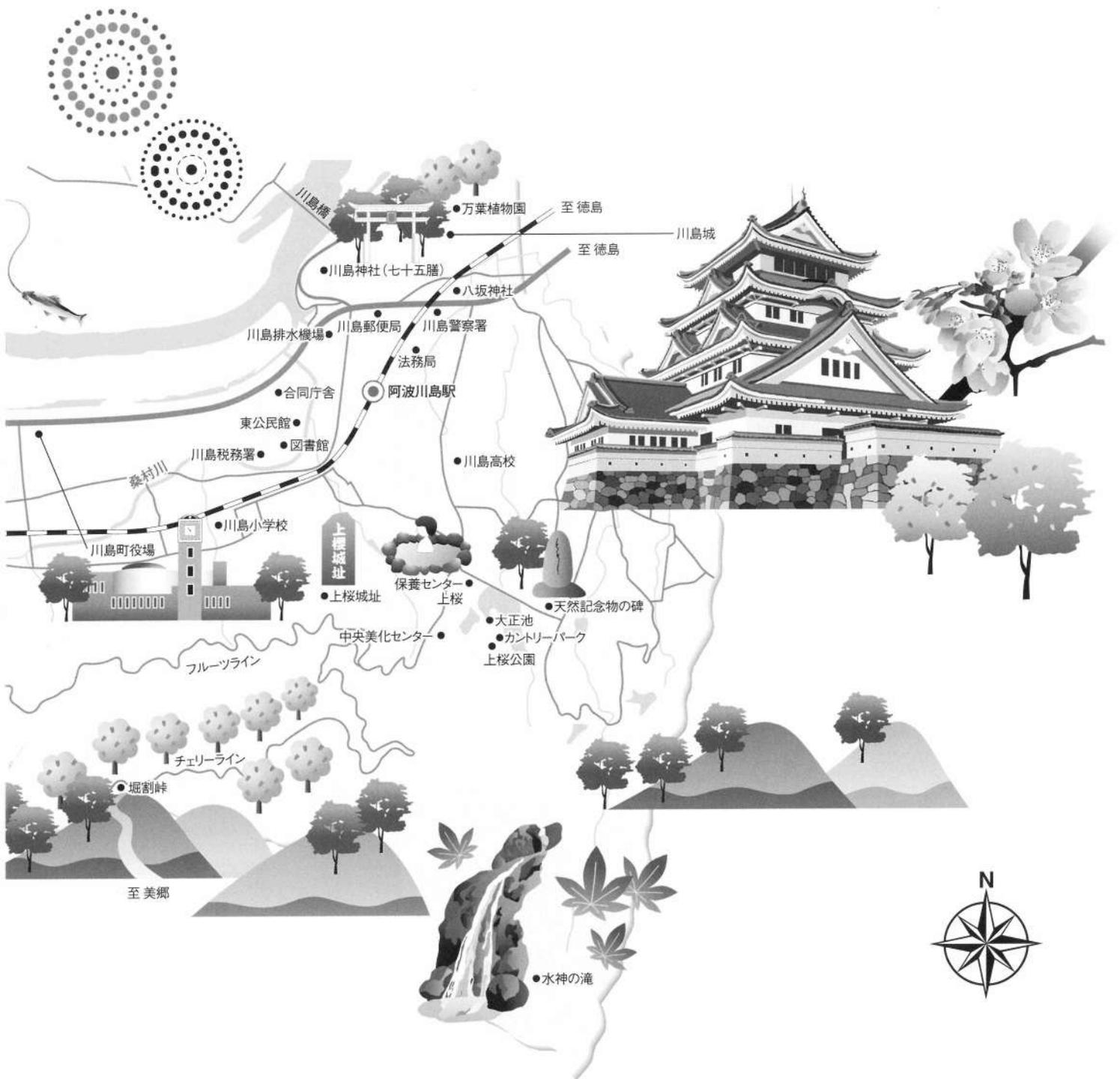
◆阿部 合併して自治体が大きくなると、日の当たるところと、そうでないところが出てくると思います。役所にお任せするだけでなく、自発的に自分たちの地区の活性化に努めなければ、その地区自体が埋没していくのではないのでしょうか。また、麻植郡という歴史ある地名が、吉野川市誕生とともに発展的に消えてしまうことに一抹のさびしさを感じますが、新しい吉野川市の

一つの文化として後世に語り継いでほしいですね。

◆町長 川島町の歴史をふり返ると、非常に人間のなつき合いがされてきた町なんだということがわかりました。吉野川市になっても、人と人のつながりを大切にしながら人材育成に努め、地道な部分での地域づくりを続けていきたいと思います。今後の町づくりにも、どうぞご理解とご協力をお願いいたします。本日は本当にありがとうございました。



※この内容は、平成16年6月22日に川島城で開催された座談会を編集したものです。



◎ ニツ森公園

学駅南のニツ森には吉本神社と春日神社が祀られ、その一帯が公園として整備されています。月見や花見の名所としても有名です。



◎ 保養センター上桜

町民の生活向上をはかるための福祉施設。大浴場、展望浴場、会議室などがあり、町民の憩いの場として幅広く活用されています。



◎ 農村環境改善センター

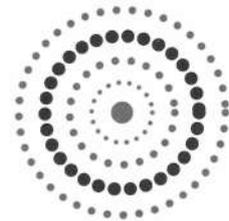
地域のコミュニティスペースとして、幅広く町民に利用されています。また、毎年、1月には成人式の会場となっています。



◎ 川島町役場

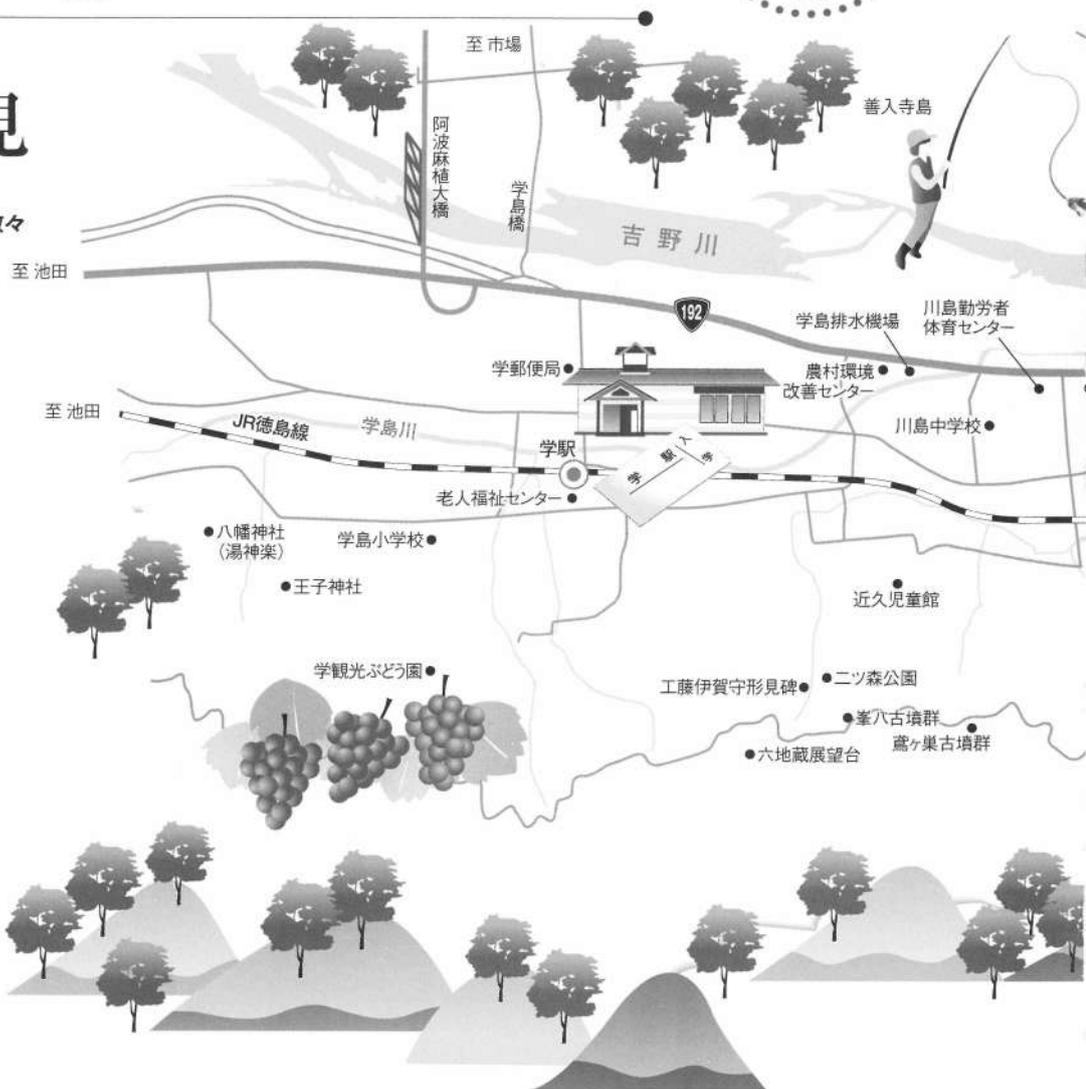
川島町役場は町の中核機関であり、町民と行政を結ぶ場ともなっています。現在の庁舎は平成10年に落成しました。

川島町マップ



ふるさと再発見

町をうるおす吉野川や緑豊かな山々
川島城をはじめとする歴史スポットの数々
今一度町を見渡せば
新しい魅力がいっぱいです。



学駅とご入学切符

JR学駅の入場券は受験生に大人気。学駅の「学」と入場券の「入」とを合わせて「入学」とし、さらに5枚1度に購入すれば「ご入学」となるため、昭和49年ごろから合格祈願のために購入する人が急増しました。駅まで出むかなくとも、郵便で購入することができ全国から注文が殺到しています。



ご入学切符



◎ カントリーパーク

グラウンドや遊具広場などがあり、家族連れで一日中楽しめる公園です。大正池の周囲には緑も多く、絶好の散策路となっています。



◎ 川島勤労者体育センター

勤労者や町民のための体育施設であるとともに、式典や大会など町のさまざまな行事にも利用されています。



◎ 近久児童館

子育て家庭に対する支援の場や、放課後児童クラブなどの拠点として活用されています。幼稚園児・小学校児童あわせて定員は60名。

まちのインフォメーション



【位置と沿革】

川島町は、徳島県の北部を流れる吉野川の中流右岸に位置し、東は鴨島町、西は山川町、南は高越山脈を隔て美郷村に、北は吉野川をはさんで市場町に接しています。

町の面積は、東西が6.24km、南北が4.06kmの17.69km²で、地勢的には吉野川と高越山脈にはさまれた沖積層平野が東西に伸びた形になっています。また、主要交通は国道192号とJR徳島線が平野部の中心を東西に縦貫しています。

現在の川島町は昭和30年2月11日、町村合併促進法の適用を受け、川島・学島両町村の合体合併により誕生しました。

【川島小唄】

作詞 長野徳治
作曲 日比生富彦

- 一、ハアー阿波の川島よいところ
昔床しい歴史の町よ
しのお城山上桜
滝は水神しぶきにぬれて
月の名所は二ツ森
- 二、ハアー阿波の川島よいところ
人を育む文化の町よ
流れ豊かに吉野川
おどる若あゆ香りも高く
望みはるかなあかね雲
- 三、ハアー阿波の川島よいところ
明日へのびゆく工場の町よ
ひびく機械が幸福呼ぶよ
ぶどう畑で乙女が招きや
山にみかんの花も咲く
- 四、ハアー阿波の川島よいところ
みんな歌おう住みよい町よ
老いも若きもおしなべて
肩をならべて手拍子うてば
町に希望の鐘が鳴る

【川島町民歌】

作詞 東根泰章
補作 藤村正
作曲 鷹雄城
編曲 原田良一

- 一、大空遙か 果てしなく
四国の峰に 風光る
希望の虹も心に溢れ
ああ躍進の 陽は昇る
わが町 わが町 川島町
- 二、川島城に 上桜
歴史を語り 花香る
ぶどうの学の 世評も高く
今 観光の 夢を呼ぶ
わが町 わが町 川島町
- 三、産業文化 育みて
瀬音も清き 吉野川
理想の明日へ 伸び行く町に
ああ栄光の 鐘が鳴る
わが町 わが町 川島町



発刊のごあいさつ

足掛け50年に渡る歴史の間、私たちを取り巻く環境は格段に向上いたしました。道路網や情報網の整備により生活圏は拡大し情報を的確に迅速に入手することができるようになりました。しかし、その反面、それらを利用した新しい社会的問題も発生しております。幸いにも、現川島町制が施行された昭和30年2月11日以来、笹本初太郎初代町長からはじまり私で7代目の町長となりますが、この間、住民の皆さま方の弛まぬ努力と研鑽により本町は人間愛豊かな町として誇りを持つ町づくりがなされてきました。

これからはじまる吉野川市という新しいステージは、真に住民主役の地方自治が推進され、行政は住民のサポーターという役割を明確にしなければなりません。

皆さまのさらなるご隆盛と地域貢献を祈念しごあいさつとさせていただきます。

徳島県川島町長 中村 健



アクセス

- 大阪から………高速バス2時間30分(徳島市まで)
- 和歌山から……フェリーポート海上2時間(徳島市まで)
- 岡山から………車2時間30分、JR2時間30分
JR阿波川島駅・学駅下車
- 高松から………車1時間30分、JR1時間50分
JR阿波川島駅・学駅下車
- 徳島市内から…車50分、JR40分
JR阿波川島駅・学駅下車



町章



町の花／キク



町の木／カエデ



発行年月◆平成16年8月

発行◆徳島県川島町

〒779-3395 徳島県麻植郡川島町大字桑村2421-1

TEL 0883-25-6611 FAX 0883-25-6666

ホームページアドレス <http://www.tcu.or.jp/kawashima/>

編集◆川島町企画人権課

制作◆(株)ジャパンインターナショナル総合研究所・四国支社